

聖徒の道

10
1993

末日聖徒
イエス・キリスト
教会



聖徒の道

1993年10月号



表紙——銃声や砲声の絶えないイスラエルの地で、タバナクル合唱団の歌声はひとつとって平和の調べを奏でた。写真は、園の墓で合唱団を指揮するジェラルド・D・オトリー兄弟。(本誌「声を合わせて」p.10参照。写真撮影デビッド・ガート、スコット・クヌードセン)

こどものページ——「発見の毎日」絵アン・マリー・オーボーン。

一般

大管長会メッセージ——「福音は真実です，違いますか」

第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー	2
声を合わせて ラリーン・ガート	10
インド，パキスタン，バングラデシュ，スリランカにおける教会	22
デビッド・O・マッケイ——人の値 レオン・R・ハートショーン	26
啓示の家	34
救われた本 クリスチーナ・アントニオ	42

青少年

何か起きるまでただ待っているだけですか

ピエール・アンシアン	8
いつか奇跡が起きて テラ・ピアソン	33
自分を好きになる ジョージ・I・キャノン	46

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——才能を分かち合う	25

こども

モルモン経物語——ラモーナイの父にふくいんをのべつたえるアロン	2
小さなおともだちへ——マリオン・D・ハンクス長老	4
歌 この体は神の宮 ドンネル・ハンター，ダーウィン・ウォルフオード	6
チーム分け マーク・シェイファー	7
分かち合いの時間——わたしの体はかみのみや	
ジュディ・エドワーズ	10
ジェーンの花 デブラ・ホブキンソン	12
おもちゃばこ	16

聖徒の道

1993年10月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グローバーク、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー

工程管理：メアリーアン・マーティンデル
チーフアートディレクター：M・M・カワサキ
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道 1993年10月号第37巻第10号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円、大会号350円

Copyright © 1993 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazine October 1993, Japanese. 93990300.
●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

霊が鼓舞されました

私は末日聖徒ではありませんが、毎月「タンプリ」(フィリピンの英語版)を愛読しています。記事を通して霊が鼓舞され、涙ぐんでしまうこともしばしばです。

教会の機関誌について話し合える教会員たちの中で生活できることにとても感謝しています。毎月、届くのが待ち遠しいです。

フィリピン、イロイロ州カリノグ
アグネス・C・ギサジオ

伝道の道具に用いています

現在、ジョージア州アトランタ伝道部で伝道していますが、私たちは「リアホナ」(スペイン語版)を伝道に大いに活用しています。「リアホナ」には、毎回教会幹部からの勧告が載せられていて、世界じゅうの教会員たちと接することができるのです。

最近私たちは、ある家族にバプテスマを施しました。彼らは「リアホナ」を通して、最初に教会を知りました。またある教会員は、自分の職場である美容院に「リアホナ」を置いていました。すると、客のひとりが「リアホナ」のある記事を読み、教会についていろいろ質問をしてきました。それからその女性は宣教師と会い、教会に招待され、ついにはバプテスマを受けることになりました。

私たちもこの姉妹の模範に倣う必要があります。教会員でない人の目に触れる場所に教会の機関誌を備えようではありませんか。このような簡単な方法での伝道が、イエス・キリストの福音を分かち合うすばらしい機会となるでしょう。

ジョージア州アトランタ伝道部
アルフレード・グートイエレス長老

慰めを受けます

「リアホナ」(スペイン語版)は、私にとって主のみたまのようです。記事や物語、読者の投稿を読んでいつも慰めを受けています。私は家族とともに

1991年にバプテスマを受けました。教会員になって間もない私ですが、「リアホナ」の記事を通して、聖典に対する理解を深めることができました。スペイン、ラスバルマス伝道部
ガルダー支部(カナリア諸島)
バルトロメ・A・ペレス・ブリート

守り手

「レトワール」(フランス語版。「星」の意)は私の守り手になっています。どうしたらいいかわからないときや、間違ったことをしてしまったときなど、この本の中から答えを見いだすことができます。ときどき思うのですが、もし教会員一人一人が、個人の祈りや聖典の研究から、そして教会の機関誌から問題解決の答えを見いだそうとするなら、監督の重荷をかなり軽減できるのではないのでしょうか。

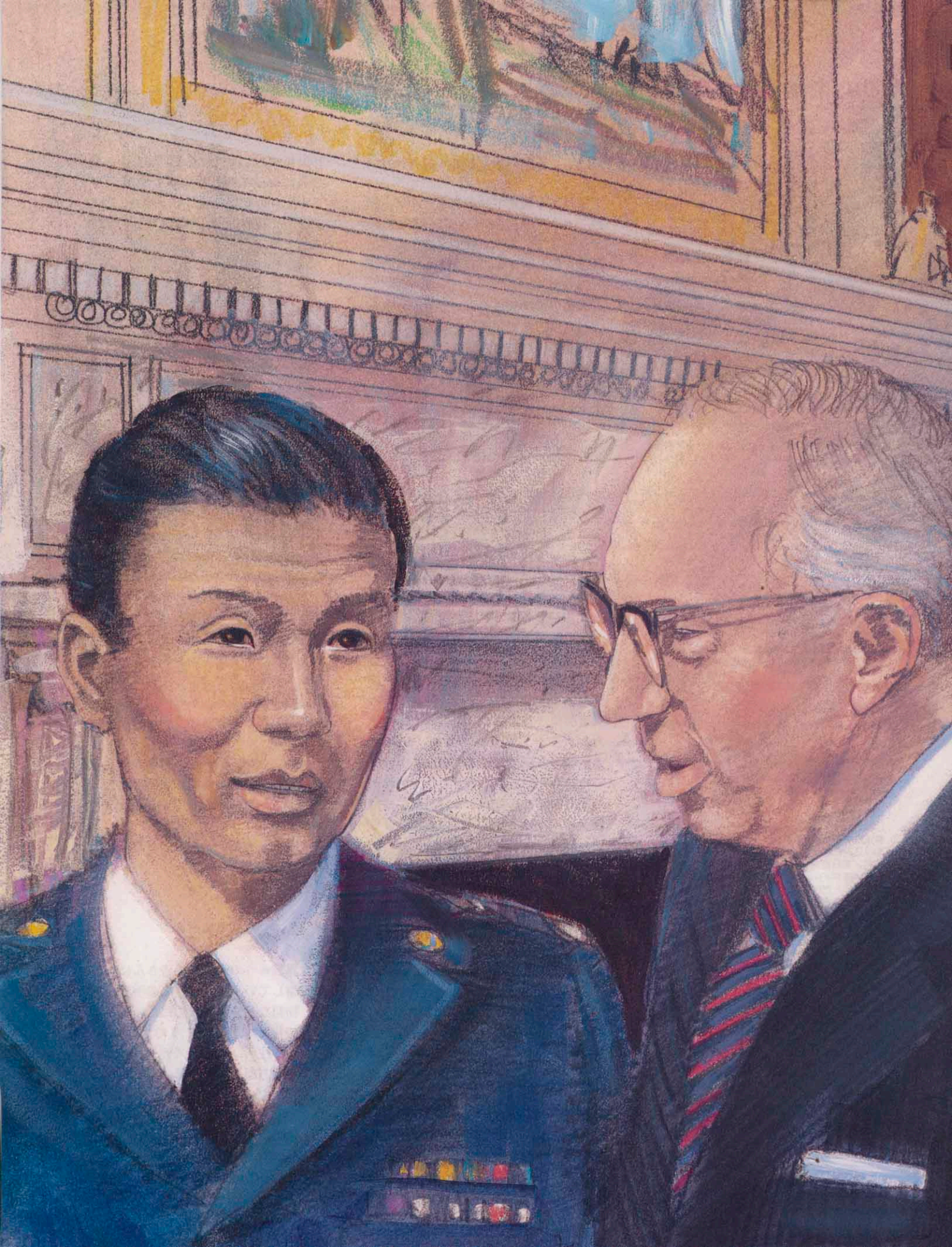
たとえば、大管長会のメッセージを読むことは、教会幹部からまったく個人的な面接を受け、導きとなる勧告をいただけるようなものです。また世界じゅうの末日聖徒について書かれた記事を読んでいると、私たちはひとつの大きな家族であるという一体感を感じます。

レッスンや話の責任、家庭の夕べの資料として、また毎日の生活の支えとして、この機関誌を活用するようお勧めします。
フランス、ナンシースターキ部
トール支部
ステファニー・ピート

編集部から

世界じゅうの愛読者の皆さんに心から感謝しています。皆さんの手紙、記事、物語などをお寄せください。どんな国の言葉でもけっこうです。(投稿の際は、住所、氏名、スターキ部/伝道部/地方部、ワード部/支部名を明記してください)あて先は下記のとおりです。

International Magazines
50 East North Temple Street
Salt Lake City, Utah 84150 U.S.A.



「福音は真実です、 違いますか」

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

私はこれまで世界の各地で数多くのすばらしい人々とお会いする機会に恵まれてきました。そのような人々の中には、忘れ難い印象を残してくれた人もいます。何年前前に紹介したある話を、もう一度皆さんと分かち合いたいと思います。合衆国で高度な訓練を受けるために遠方の国から派遣された、ある^{そうめい}聡明で若い海軍将校の話です。彼は合衆国海軍の何人かの同僚の行ないを見て心を引かれ、彼らの宗教について話してもらうことにしました。彼はキリスト教徒ではありませんでしたが、その話に興味をそそられました。ベツレヘムでお生まれになり、全人類のために命を^{きさ}捧げられた、世の救い主イエス・キリストについて、同僚たちは話してくれました。さらに、永遠の父なる神と復活した主が少年ジョセフ・スミスにみ姿を現わされたことや現代の予言者についても語り、主の福音を教えてくださいました。みたまが心を動かし、彼はバプテスマを受けました。

私はこう尋ねました。「福音のためにそれほど大きな代価を、喜んで払うおつもりですか。」すると、黒いひとみに涙を浮かべたこの青年は、整った褐色の顔をさっと輝かせ、こう言いました。「福音は真実です、違いますか。」

私が彼を知ったのは、彼が祖国に帰る直前のことです。一連の改宗の話聞いた私はこう言いました。「故国の人々はキリスト教徒ではありませんね。キリスト教徒として、特にモルモン教徒として帰国されることで、何か支障はありませんか。」

彼は顔を曇らせ、こう語りました。「家族はがっかりするでしょう。私を勘当し、のけ者扱いにするかもしれません。仕事の上でも将来的にあらゆる機会から見放されると思います。」

私はこう尋ねました。「福音のためにそれほど大きな代価を、喜んで払うおつもりですか。」

すると、黒いひとみに涙を浮かべたこの青年は、整った褐色の顔をさっと輝かせ、こう言いました。「福音は真実です、違いますか。」

私はこのような質問をしたことを心に恥じながら答えました。「そのとおりです。確かに真実です。」

「それなら、ほかのことを気にする必要はないわけですね」という言葉が返ってきました。

私はこの質問を皆さんにも投げかけたいと思います。「福音は真実です、違いますか。それなら、ほかのことを気にする必要はないわけですね。」

統計を見ると教会の成長ぶりに感動と満足を覚えます。そして、何年前かに放映されたテレビ番組が思い出されます。合衆国宗教協議会の議長がインタビューで、著名な宗教団体の会員数が減少していること、また急増している宗教団体もあることに触れ、退潮の理由をこう語っていたのです。「これらの宗教団体は寛大になりすぎたからです。どういった人でも会員になるのを認め、どのような人でも会員としてとどまることを許しています。信仰や貢献について何も厳しい要求をしないのです。」彼はまた一方で、時間と労力、財力の犠牲を求める宗教は目覚ましい発展を遂げていることも指摘していました。

さらにこうも語りました。「わが国で100万以上〔の〕会員を擁する教会の中で、最も急速な成長を遂げているのは、ソルトレークシティに本部を置くモルモン教会、

つまり末日聖徒たちです。この教会は毎年5パーセントの伸びを示しています。これは驚異的な数字です。」

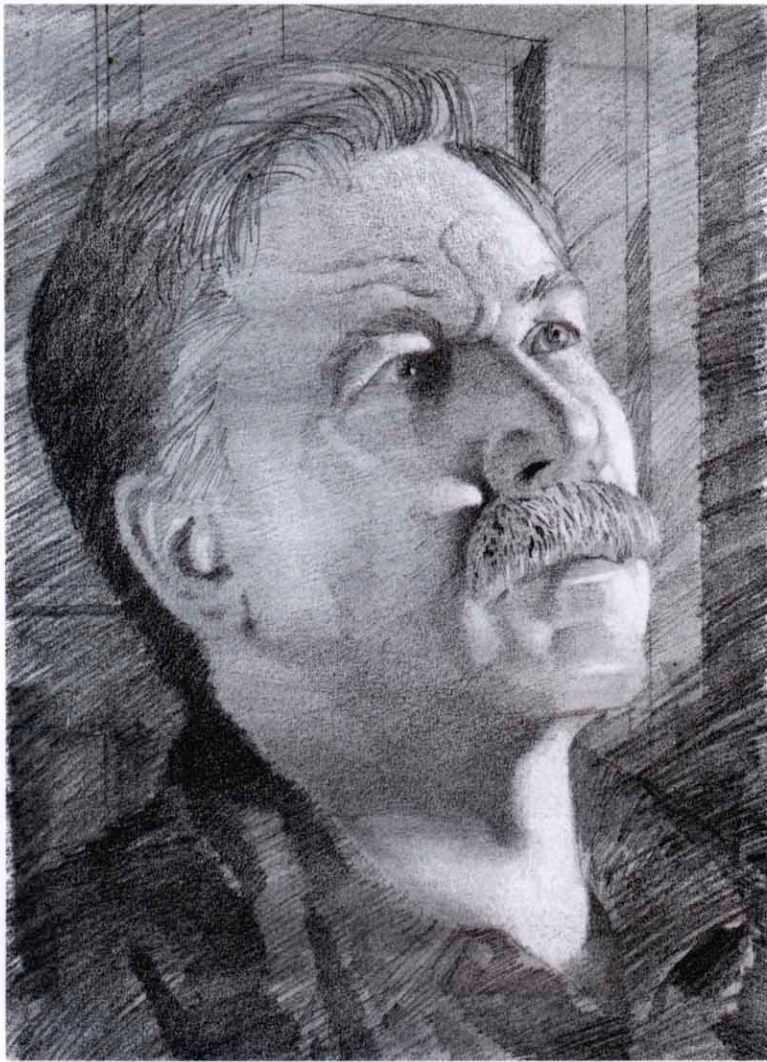
心ある人ならば、この非常に印象的な言葉に心を向けることでしょう。献身と犠牲、訓練を要求する宗教は、誠実な会員を得、人々の関心と尊敬を受けるのです。

宗教とは常にそうしたものです。救い主はニコデモに対して語られた時、決してあいまいな言葉を用いられませんでした。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ3：5)例外は存在しません。律法に従うことにあいまいさは許されていないのです。これは、主が言われたすべての事柄について言えることです。

パウロはイエス・キリストの福音で求められている事柄を示すに当たって、言葉を濁したり、あいまいな言葉を使ったりはしませんでした。今日でも事情は変わっていません。主ご自身、「門は狭く、その道は細い」(マタイ7：14)とおっしゃいました。人々の行ないとそれに伴う永遠の行く末に関与している組織は、何らかの指針を持ち、それを堅持しなければなりません。ある程度の訓練、特に自己修養を求めない組織は、人々の忠誠を長期にわたって得ることはできないのです。それによって生活から安楽さが消えるかもしれません。実際に犠牲を払わなければならないかもしれません。しかし、こうした現実的な要求の中から人格と強さ、高潔さは培われます。放縦の中から偉大なものは生まれません。高潔、誠実、強さという徳は、私たちが天与の真理の要求するところに従って自己訓練を行なうにつれ、努力を重ねながらはぐくんでいくものなのです。

しかし、もうひとつ大切なことがあります。それがなければこの自己訓練も形ばかりのものに終わってしまうでしょう。訓練のための訓練は抑圧でしかないからです。そのような訓練は、イエス・キリストの福音の精神に反しています。それはまた、恐れのお気持ちから強いられるものとなり、否定的な結果しか生じません。

しかしながら、個人の確信に基づく自己訓練は肯定的



バプテスマを受けたいという妻の願いに困惑し、彼は怒りを覚えながら戸外を歩いていた。すると、何かしら祈りたい気持ちに駆られ、疑問に答えてくださるよう神に懇願した。

な結果をもたらし、驚くほど人間性が鍛えられ、高められ、強められます。宗教に関して言えば、人は真理に対する強い確信を原動力にして行動するとき初めて、自己を訓練するようになります。教会が要求するからではなく、神が生きておられること、自分が永遠で無限の可能性を持つ神の子供であること、奉仕には喜びがあり、大いなる目的のために働くことによって心が満たされることを、心の中に知識として持つからです。

この教会の著しい成長は、教会が会員に多くを要求したためではなく、会員が心の中に、この業がまさに神のみ業であること、義に基づく奉仕の中にこそ幸福と平安、満足があることを確信したために実現したのです。

教会の強さは、全世界の何千もの礼拝堂の中にも、教会の大学やセミナー、インスティテュートの施設の中にもありません。すばらしい施設はたくさんありますが、

それらは真の強さのわき役でしかないのです。この教会の強さは、教会員の心の中に、この業が真実であるという個人の証と確信の中にあります。この証を得ると、教会の要求する事柄はもはや重荷ではなく、やりがいのある課題となります。救い主は言われました。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い……。」(マタイ11:30)

イエス・キリストの教会の献身的な会員にとって、教会の責任というくびきや教会での指導という重荷は、問題ではなく、むしろ進歩の機会となります。

以前私は、教会に加入して間もない技師の体験談を聞いたことがあります。宣教師の訪問を受けた彼の奥さんは、ふたりを家に招き入れました。奥さんは宣教師のメッセージに積極的だったのですが、ご主人の方は自分の意に反して勝手にレッスンが進んでいるように感じていました。ある晩、奥さんはバプテスマを受けたいと、ご主人に打ち明けました。ご主人の心には

怒りが込み上げました。「それがどんな意味か妻はわかっているのだろうか。時間は取られる。什分の一は納めなければならない。友達とだって別れる。たばこもあきらめなければならぬ。彼は上着をつかみ、ドアを荒々しく閉めて夜の戸外へ出て行きました。歩きながら、奥さんを、宣教師を、宣教師にレッスンを許した自分を、ののしったのです。やがて歩き疲れ、怒りも収まってきました。すると何かしら祈りたい気持ちに駆られました。彼は歩きながら祈りました。疑問に答えてくださるよう、神に懇願したのです。その時、はっきりと心に訴えるものがありました。「福音は真実である。」そう告げる声が聞こえたようです。

「福音は真実、福音は真実、……。」繰り返しつつ歩いていると、安らかな思いに満たされました。家に着くまでには、あれほど怒りを覚えたもろもろの制約や要求が、

進歩の機会に思えてきたのです。玄関のドアを開けると、そこにはひざまずいて祈る奥さんの姿がありました。

ここまで話し終えると、彼は聴衆に向かい、自分たちの家庭に訪れた喜びがいかに大きいものを話してくれました。什分の一は問題ではありませんでした。すべてを与えてくださった神に一部をお返しすることは、苦になりません。奉仕の時間も問題ではありません。毎日の時間をあと少し慎重に計画すればよかったです。教会での責任も問題ではありませんでした。むしろ成長を実感し、人生に対する見方が変わりました。こうして、物質界の事象を扱うことに慣れていたこの聡明で有能な技師は、自分の生活に起きた奇跡に目を潤ませながら、厳粛な証を述べたのです。

このような体験を持つ人々は、世界に数え切れないほどいます。才能や教養に恵まれた人、実業家や専門家、現実的で、世の中のことだけを考えていた実利的な人が、今や心の中に静かな証の火を燃やしているのです。彼らは神が生きておられること、イエスがキリストであること、この業が神のみ業であり、救いの機会を受け入れるすべての人に祝福をもたらすために地上に回復されたことを、証しています。

主は言われました。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」(黙示3:20)

イエスはまた、神殿の中でユダヤ人にこう言われました。「わたしの教はわたし自身おしえの教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7:16-17)

これこそ「奇しきみ業」、だれでも自分自身で知ることができるのです。真理を教えず、証をしない教師や説教者、聖職者に頼る必要はありません。いにしへの時代にヨブが述べたように、「人のうちには霊があり、全能

者の靈感が人に悟りを与える」(欽定訳ヨブ32:8)のです。

人は、毎日変わることなく朝日が昇るのを確信しているように、聖霊たまものの賜によって、福音が真実であることをはっきりと知ることができます。そしてそれを知った人は、人生の意義と目的、隣人に対する大きな責任、家族と神に対する責任に気づき、みずからを訓練しようとしています。

主は言われました。「われに就きて学び、わが言ことばを聴き、わが『みたま』の柔和なる道みちを歩め。さらば、汝なんじわれあに在りて安きを得ん。」(教義と聖約19:23)

これは「人知ではとうてい測り知ることのできない」平安です。(ピリピ4:7)この平安は頭で理解して得られるものではなく、みたまによりもたらされるものだからです。「神につける事柄」は「神のみたま」によって悟るものだからです。(欽定訳Iコリント2:11)

何年前か、ドイツのベルヒテスガーデンで開かれた、軍務に就く教会員の大会に出席した時のことです。私はそこで、高い教養を身につけた才気あふれるある若い女性の話はなしを聞く機会を得ました。彼女は陸軍少佐と医学博士の肩書きを持ち、その専門分野では高い評価を受けている人でした。彼女はこう語りました。

「私が世の中で何よりも望んだのは神に仕えることでした。ところが、どんなに努力しても神を見いだせませんでした。そんな時、奇跡が起きたのです。神が私を見つけてくださったのです。1969年9月のある土曜日の午後でした。私はカリフォルニア州パークレーの実家にいました。ドアのベルが鳴ったので、出てみると、ワイシャツとネクタイ、それに背広に身を包んだふたりの青年が立っています。髪の手入れも行き届いていて、好感を持った私はこう言いました。『何のセールスか知りませんが、買わせていただきますわ。』すると、青年のひとりが言いました。『セールスマンではありません。私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師で、お話をしに伺ったのです。』私はふたりを家に招き入れました。



軍医としての敏腕を評価されている彼女が、何より望んだのは神に仕えることだった。「ところが、神を見いだせなかったのです。そんな時、奇跡が起きました。神が私を見つけてくださったのです。」

宣教師は自分たちの信仰について話してくれました。

これが証を得るきっかけでした。私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である特権と榮譽に、言葉に尽くせない感謝の気持ちを抱いています。喜ばしい福音が心にもたらしてくれた喜びと平安は、この世の天国ともいべきものです。み業に対する私の証は、私の生活で一番大切なものであり、天父の贈り物です。私はこの贈り物に、永久に感謝し続けると思います。」

このような知識は、いにしへの時代と同様、今日も与えられます。私の友人である海軍将校の場合も、前述の技師の場合も、証を紹介したこの医学博士の場合もそうです。同様の体験を持つ方は何百万人もいらっしゃると思います。これらのことについて聖きみたまの証を求めている方があれば、それが得られるように、私の証をお伝えしたいと思います。かつてペテロが得たと同じよう

に、今日もその証を受けることができます。

「イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、……『あなたがたはわたしをだれと言うか。』

シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです。』

すると、イエスは彼にむかって言われた、『バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。』」（マタイ16：13、15-18）

この啓示の岩は、神につける事柄の知識の源です。永遠の真理を証するのは聖きみたまであり、その証を探し求め、受け入れ、育て、それに従って生きる人に対しては、地獄の門も力を及ぼすことはできません。

私はこれらの神聖な事柄を厳粛に証し、真理を熱心に求めるすべての人にこの知識が与えられるよう祝福いたします。□

話し合いのポイント

1. 福音で求められている事柄について、主はこう宣言しておられる。「門は狭く、その道は細い。」（マタイ7：14）
2. 人は真理に対する強い確信を持つと、福音が要求することに従えるよう、みずから進んで自己を訓練するようになる。神が生きておられること、自分が永遠で無限の可能性を持つ神の子供であること、従順には喜びが伴うことを知るからである。
3. 福音の要求する自己訓練を通して、人格と強さ、高潔さが生まれ、平安と成長の機会がもたらされる。

伝 道部長から転任を命じられた時、これは自分に対する罰に違いないと思ったほどでした。私はフランス人で、フランスとスイスの両国で伝道していました。そしてこの時、私と新しい同僚はアビニヨンの巡回宣教師に召されたのです。この町では何か月もの間、改宗者のバプテスマがひとつもありませんでした。

アビニオンに到着した同僚と私は、自分たちの置かれた状況について話し合い、熱意と力が得られるよう努めながら、最初の夜を過ごしました。何か起きるまでただ待つという方法もありました。しかし伝道期間がいかに短

いかを考えると、貴重な月日を無駄にしたくはありませんでした。

私たちはマタイによる福音書第19章26節の聖句を思い起こしました。「神にはなんでもできない事はない。」そして、こう考えました。「私と同僚がこの地に召されたのには、何か訳があるのではないだろうか。この地の人々を改宗するのは、思っているほど絶望的ではないのではなかろうか。問題は、人々に対する宣教師側の取り組み方だけなのではないだろうか。主は私たちの信仰、努力そして望みに応じて報いる準備をしてくれているのではないだろうか。」

私たちは、ほかの人たちがアビニオンについて言った言葉を気にしないことにしました。祈りの中で、備えられた人に導かれるよう主に願い求めました。翌月のバプテスマに向けて準備のできる人に会えるよう願ったのです。そして全力で働くことを主に約束しました。

2日後、ハルーンという人と出会い、福音について教え始めました。そして主と約束をした日からちょうど1カ月たった日に、私たちは彼にバプテスマを施しました。その後ハルーンは、自分の住んでいるアパートの2階に住む人々を私たちに紹介してくれました。

何か起きるまで ただ待っているだけですか

ピエール・アンシアン



こうしてランガー家族を教えることになりました。彼らも福音を受け入れ、バプテスマを受けました。愛する人々が改宗するという奇跡をこの目で見るのは、なんともすばらしいことでした。

ハルーンとランガー家族の住んでいるアパートは2階建てでした。部屋は、各階に1世帯分ずつしかありません。そうすると、このアパートの住民全員が教会に改宗したことになります。つまり私たちはこのアパートで、100パーセントの成功を取めたのです！

4カ月間働き、犠牲を払い、奇跡を目の当たりにし、そして祝福を受けていくうちに、アビニヨンの小さな支部

は、実際に以前の2倍にも大きくなりました。この地区の宣教師は、15人もの人を教会に導いたのです。今では宣教師皆がこの町で伝道したいと望むようにまでなっています。ついに良い評判が戻りました。この町に対する悪い考えは覆されたのです。

伝道が終わって1年後、私はスイス神殿に参入しました。その時、思いがけず大きな喜びに包まれました。なんとランガー夫妻と3人の子供たちに会えたのです。それだけでなく、ランガー家族が聖壇の前にひざまずき、家族

として結び固められるのを見ることができました。今エリック・ランガー兄弟は大祭司で、アビニヨン支部の支部長を務めています。

主が惜しみなく祝福を与えてくださることに感謝しています。そしてアビニヨンの町での最初の夜に、主が同僚と私を導いてくださったことに感謝しています。その時私たちは全力を尽くすことを決心したのです。もしあの時、何か起きるのをただ待っていただけなら、どうなっていたでしょうか。□



ILLUSTRATED BY DOUG FANKEL



PHOTOGRAPHY BY DAVID AND LARENE GAUNT

声を 合わせて

銃声や砲声の絶えないイスラエルの地で、
タバナクル合唱団の歌声は
ひとつとなって平和の調べを奏でました。



ラリーン・ガート

ベツレヘム近郊にある羊飼いの野に、雲間を縫って
日の光がさし込んでいます。朝の澄んだ空気の中、
羊の鳴き声と時折響くやぎの鈴の音が聞こえてきます。
ベドイン族の羊飼いが群れを山に連れて行くのです。緩
やかな起伏のある牧場は、その昔キリスト降誕の夜にみ
使いたちが現われた時とほとんど変わっていません。今
も小高い丘を両側に見ながら、谷へと続いています。丘
は石灰岩の段丘となっており、ときどき日の光に輝いて
見えます。救い主の生誕の地ベスレヘム(ベツレヘム)は
右側の丘に位置し、朝もやの柔らかなベールを通して白
く光っています。

イエスが八福の教えを授けられた山で歌うタバナクル合
唱団の団員(左)は、「喜び、よろこべ」(マタイ5:12)
と言われた救い主の言葉を体現している。上——羊飼
いの野で。



やがて、モルモンタバナクル合唱団の歌う「主はわが飼い手」のメロディーが、羊飼いの野を囲む丘や谷に流れていきます。「主はわが飼い手 われ足れり 緑の野に 住まわせて 憩う水際に 連れたもう」そして、賛美歌の最後の歌詞「何をか乞わん この上に」が朝のさわやかな空気に声高らかに歌われ、歌がやみました。歌声は谷や丘に共鳴してこだまとなって長く響き、皆を驚かせました。まるでタバナクル合唱団の音楽がこの地を満たし、地がその音楽の消えることを拒んでいるかのようです。

1992年の12月26日から翌年1月6日まで、タバナクル合唱団はエルサレム、テルアビブ、ハイファの各地でコンサートを開き、聖地を音楽で満たしました。コンサートの模様がテレビやラジオで中継される様子は、あの丘や谷に歌声がこだましていく様子に似ていました。聴衆の反応や絶賛する新聞の紙面にも、いつまでも聞きたいという市民の思いが表われていました。

音楽は人と人を結ぶ

このたびのタバナクル合唱団のイスラエルへの公演旅行では、1992年度のリツルジカ・コンサートシリーズでエルサレム交響楽団と共演して、ベルリオーズのレクイエム作品5を歌うことがお主な目的でした。このシリーズは毎年12月から1月にかけて著名なキリスト教系の合唱団やオーケストラを招いて開かれているものです。

公演旅行の成功は、聴衆の反応を見れば明らかでした。イスラエルは多数の音楽家を輩出しています。教育があり耳の肥えたイスラエルの人々は、コンサートが終わるとすぐに会場を後にすることで知られています。しかし、ベルリオーズのレクイエムのエネルギッシュな演奏は聴衆の心を動かしました。曲が終わると一斉に拍手が起こったのです。アンコールを求めるこの拍手は5分以上も続きました。

長期にわたってエルサレムの市長を務めてきたデイ・コレック氏は、タバナクル合唱団のコンサートが果たす「橋渡し」の役割を強調し、音楽は「平和と兄弟愛を表現する重要な方法」であると語りました。

しかしながら、合唱団の音楽に対する最も劇的な反応は、ラフマニノフ(1873—1943年 ロシア出身のピアニスト・作曲家)の作品から黒人霊歌まで通常披露されるさまざまなレパートリーを歌ったアカペラコンサート(訳注——無伴奏で歌う形式のコンサート)に見られました。アカペラコンサートはいつも聴衆起立の下に合唱団のイスラエル国歌「ハーティークバ」の合唱で始まりました。コンサートは前半から、曲が進むにつれて聴衆を魅了していきました。特に「バビロンの川のほとりに」に続いて「恐れず来たれ、聖徒」を歌った時、感動した聴衆の反応は絶大なものでした。

このコンサートの後半では、陽気な曲に聴衆の中には身を乗り出す人たちもいました。また「さあ、声を上げ」の歌では、「手をたたこう」の歌詞で音楽に合わせて手をたたく人たちもいたほどでした。口元のほころびが笑顔に変わりました。曲が終わった後の拍手が1曲ごとに大きくなっていきます。最後の曲「シンディ」のシンコペーション(訳注——アクセントの強弱の位置を本来の場所からずらしてリズムに変化を与えること)をおいたリズムに合わせて聴衆は足で拍子を取り、ひざをたたき、頭を振ります。合唱団が「お帰り、かわいいシンディ、いつか結婚しよう」と手拍子を取りながら歌い、オルガン奏者や打楽器奏者たちが馬のひづめの音や鈴、タンバリンの音を付け加えます。曲が終わり、皆笑みをたたえながら拍手をしています。中には手を頭上高く掲げて拍手している人たちもいます。やがてその拍手は、アンコールを求める拍手へと変わっていきます。

そしてアンコール曲が始まりました。魂にしみ入るような「黄金のエルサレム」の最初の数小節がコンサートホールに流れると、聴衆は息をのみ、男性の独唱者がへ

ダヴィッド・シャロン氏の指揮の下、ベルリオーズのレクイエムを歌うタバナクル合唱団とテナー歌手のロバート・ブリアルト氏、そしてエルサレム交響楽団。エルサレム公演(左)とテルアビブ公演(右)。1837年、フランスの作曲家エクトール・ベルリオーズによって作曲されたこのレクイエムは、死の瞬間から裁きの日、そして贖罪と復活の日までを音楽で表現したものである。

ブライ語で歌い出したところで拍手がわきました。イスラエルの人々がこの曲に対して深い郷愁を抱いていることは容易に察することができました。ある女性は喜びのあまり手で口を覆い、謹厳な顔をした男性は眼鏡を外して人目をはばからずに泣いていました。歌が進むにつれ、客席の人たちの多くは合唱団とともに静かに口ずさみ、またほかの人たちはほおを伝う涙をぬぐっていました。

曲が終わると、指揮者のジェラルド・オトリー兄弟は聴衆の注意を会場に居合わせた「黄金のエルサレム」の作曲家ナオミ・シマール女史に向けました。彼女はエルサレムだけでなくテルアビブのコンサートにも出席しました。シマール女史が立ち上がると、聴衆も一斉に立って最大級の拍手をもってたたえました。1967年の6日戦争の折に人々の心をとらえたこの歌に、敬意を表したのです。この歌は、黄金でできたエルサレムのミニチュアを妻に贈ったというアラブの族長の伝説を基にしたもので、1967年度のコンテストの優勝曲でした。戦争中はこの曲がラジオからひっきりなしに流れ、国民の心に深く刻みつけられました。そして、かつて分割され、閉鎖地区となっていた町がユダヤ人に戻った時には、イスラエルの兵士、市民を問わずこの歌が皆の心をひとつに結びつけていたのでした。

アンコールの拍手が再び始まり、合唱団は「リパブリック賛歌」を歌い始めました。曲の終わりに近づくと、ホールの照明がつき、聴衆は曲のリズムに合わせて手拍子を取り始めました。曲の最後は拍手で聞こえなくなり、客席の聴衆はひとり残らず立ち上がっています。

合唱団恒例の最後のアンコール曲「神よ、また逢うまで」が始まっても、客席は立ったままです。涙をぬぐっている人が目立ちます。

ブリガム・ヤング大学エルサレムセンターでホスト役を務めたロバート・コンディック兄弟は「音楽に国境はありません」とエルサレム・ポスト紙とのインタビューで語っています。「イスラエルの地で、言葉では表現で

きないほどのすばらしい経験ができたのも、歌が基となってくれたからです。」

この言葉は、タバナクル合唱団の行く先々で繰り返し証明されました。どのコンサートでも、ある一瞬を画して客席がひとつとなり、個人では到達し得なかった高い状態に変貌を遂げるのです。合唱団の音楽に、聴衆一人一人の感情や思い出が合わさり、会場全体が一体となるのです。そしてその瞬間、人は皆音楽という万国共通の言語に魅了され、平安を享受するのです。

.....コンサートの余韻

立ち去り難さを感じていた人々も、やっと鳴りやんだ拍手とともにされた照明に促され、次第にホールを後にします。バルコニーから階段を下り、あるいは1階からロビーに移動して、何も言わずに輝かしい表情で家路に就く人もいます。そうでない人たちはグループで集まり、興奮した面持ちで互いに語り合い、まるで全員が一斉に話しているかのようです。

●「言葉もありません。この思いを語る言葉は決して見つからないでしょう。今までこんな崇高な経験をしたことはありません。」

●「まるで空気の代わりに音楽を呼吸していたような気がします。」

●「たった今まで天国で2時間過ごしたのです。私たちはキブツ(訳注——イスラエル共和国の共同集団農場)からバスを借り切って、全員で来ました。タバナクル合唱団を聞き逃すわけにはいきませんからね。」

●「歌を通して神の愛が伝わってきました。」

●「紛争の多いこの国では、人は皆平和を待ち望んでいます。あなた方合唱団は音楽によってささやかな平和をもたらしてくれました。よく来てくださいました。」

●「すばらしい。見事でした。まるでビロードのように滑らかな歌声でした。」



- 「天国の幕が開き、天使が歌っているようでした。」
- 「このコンサートには、落ち込んだ気分でやって来ました。でも今、強められて帰ろうとしています。長い間感じたことのなかったものを皆さんが呼び覚ましてくれたのです。」
- 「今晚神のみそばに座した思いがします。」

みたまの旅

十二使徒定員会のジェームズ・E・ファウスト長老と奥さんのルーシー姉妹は、合唱団員とその伴侶、そして合唱団スタッフの総勢588人とともにイスラエルを旅しました。現在ヨーロッパ北地域会長会会長を務める七十人のジェフリー・R・ホランド長老と奥さんのパット姉妹もエルサレムで合唱団と合流しました。ふたりの教会幹部の存在と指導力は合唱団のイスラエル公演旅行の霊的な側面に大いに貢献しました。

合唱団員が味わった霊的な成長は、この宗教的に意義深い旅の中で重要な位置を占めています。合唱団の理事であるウェンデル・M・スムート兄弟はこう言います。「この公演旅行は私たち一人一人に宗教的に深い意義をもたらしました。それというのも自分の霊的なルーツ、つまり救い主が生まれ、生き、十字架にかかられた場所に立って見る事ができたからです。それらの場所は私たちが大いなる感動で包み込みました。」実際、多くの合唱団員は「キリストのもとに来る」というのは、単に聖地を訪ねる巡礼ではなく、霊の旅を意味するのだと悟ることになったのです。

合唱団と同伴者の一行は、この霊の旅を12月27日にイスラエルに到着して間もなく、ブリガム・ヤング大学エルサレムセンターの聖餐会せいさんに出席することから始めました。3面をガラスの壁に囲まれた同センターの講堂に座していると、エルサレムの夜景が見えました。目の前にはイエスが歩まれた多くの場所が一望できます。左には



ベツレヘムに通じる道、そして右にはゲツセマネの辺りが見えます。聖餐会は、開会の祈りから聖餐式、そしてエルサレムセンターのトルーマン・マドセン所長、教授のアン・マドセン姉妹、ジェフリー・R・ホランド長老の3人による話と続きました。一行は集会の間、終始みたまに満たされました。

「私は聖餐の準備を手伝いました」と団員のスティーブン・バーズリー兄弟は言います。「そしてパンの祝福をするよう頼まれたのです。私の胸に去来した思いは、言葉では表現できそうにもありません。昔この近くで救い主がなさったように聖餐を祝福するという何物にも勝る特権を得たのだと思うたびに、涙がこぼれました。そして祝福の祈りを始めると、祈りの言葉の一つ一つが口からゆっくりと流れ、快く耳に響きました。イエスの聖なるみ名を口にし、天父にパンを祝福してくださるよう願うと、感動で胸がいっぱいになりました。」

聖餐式の後でマドセン所長は、合唱団のイスラエル訪

オリブ山のドミニス・フレウィットで「わが主よ、わが神」を歌うタバナクル合唱団。ここはイエスが、エルサレムに勝利の入城をされる前にエルサレムの行く末を嘆かれ、涙された場所の近くにある。

問についてこう話しました。「長い間夢に見、待ち望んできたことが今実現したのです。主が皆さんをここに召されたのです」と。

ホランド長老は、1841年10月24日にオルソン・ハイドがオリブ山に立って、このイスラエルの地をユダヤ人の集合の地として奉献したことを引用し、こう述べました。「あなた方はこの最後の神権時代に残る思い出と歴史を作っているのです。そうはつきりと証あかしできます。」

もうひとつの霊的なハイライトは、2日後にハイファの町で受けた使徒の祝福でした。そのころには公演旅行



関係者の肉体的また実務的なプレッシャーは耐え難いほどになっていました。次のある団員の言葉は、ほかの団員の感じた同様のストレスを代弁するものです。「3カ月にわたる猛烈なりハーサルに加えて、コンサートが数回、12回ほどの収録と公演旅行のための個人的な準備、そして家族のクリスマス行事と母の死。心の負担は相当なものでした。12月26日に飛行機に乗り込んだ時には疲労困憊こんぱいしていて、とても公演旅行に出かけられる状態ではありませんでした。」それにもかかわらず、イスラエルに到着するや2日間に4つの大規模なりハーサルが待っていました。そのうち3つはベルリオーズのレクイエム(およそ1時間半の曲)のりハーサルで、そのほかに別のりハーサルがひとつとアカペラコンサートへの出演がありました。

ハイファでの最初のコンサートの前に、ジェームズ・E・ファウスト長老が一行に祝福を授けました。肉体が再新され、公演を成し遂げる強さが与えられるようにと祝福したのです。

「体の中に次第に力がみなぎってくるのを実感しました」と団員のトニー・デービス兄弟は言います。「ステージに立つころには、皆元気を取り戻していました。全力を尽くした後は、主が確かに足りない部分を補ってくださるのです。ホテルに帰ると、私はひざまずいて祈り、霊的な力だけでなく肉体的な力も賜わったことに感謝を捧げました。」

1週間後ガリリー湖(ガリラヤ湖)の近くのティベリアス(テベリヤ)で開かれた聖餐会で、ファウスト長老は合唱団の従事しているみ業の神聖さを証し、2度目の使徒の祝福を授けました。長老は祝福の中で、ヒラマン書の第10章4節から5節の聖句を引用し、主の約束を強調しました。「なんじ汝はこのように強き忍耐もつを以てこれを為したるにより、われはいつまでも汝を祝福し、言葉と行いと信仰と働おいきとに於いて汝を強くして偉大なる者となさん。」(ヒラマン10:5)

リハーサルとコンサート

リハーサルやコンサート、そして今年放映予定のテレビの特別番組の撮影などに追われながらも、団員の霊的な経験は続きました。

12月28日のエルサレムセンターでのリハーサル中に特別な経験がありました。エルサレム交響楽団の指揮者ダヴィッド・シャロン氏との最初のりハーサルでのことです。合唱団はカーテンのかかった講堂正面のガラスの壁に向かって座り、シャロン氏は合唱団とのけいこのため、ガラスに背を向けていました。リハーサルの途中でだれかがカーテンを開けたために、団員の目の前に日の光に輝くエルサレムの町が広がりました。シャロン氏は振り返ると、皆に聞こえるほどの驚きの声を上げ、両手をあごの下に当てて、しばし団員とともに見事な眺めを満喫したのでした。両者にとって実に感動的なひとときでした。

コンサートでベルリオーズのレクイエムを歌い、アカペラコンサートを上演すること自体、団員に大きな喜びと感動をもたらすに足るものでした。しかし、少なくともマイケル・マコンバー兄弟という団員にとってはイスラエルで歌うことはより重大で個人的な意味を持っていました。

マコンバー兄弟はこう語っています。「私はユダヤ教やイスラム教、キリスト教の信者のために、そして曾祖父の兄弟ジョン・アレグザンダー・クラークへの思いを込めて歌いました。」ジョン・クラーク兄弟は1894年にトルコ伝道部に召されながら、1895年に現イスラエル領のハイファで天然痘のため死亡したのです。クラーク長老はもうひとりの宣教師とともにハイファに埋葬され、その死は無駄だったかのように思われました。しかし近年になって、このふたりの墓は、イスラエルに末日聖徒の教会が古くから存在したことの証明となり、エルサレムセンター建設の認可を得るうえで役立ったのです。

「私たちは詩篇第137篇を題材にした感動的な曲を歌っ

左——合唱団の公演の成功は長時間に及びリハーサルに支えられている。ツアー中も練習は欠かさない。オルガン奏者のリチャード・L・エリオット兄弟と選曲の打ち合わせをするジェラルド・D・オトリー兄弟(右)。彼は、合唱団の団長と指揮者を兼任している。

右——合唱団の週1度のラジオ・テレビ番組「ミュージック・アンド・ザ・スポークン・ワード」はロイド・D・ニューエル兄弟の司会で、ブリガム・ヤング大学エルサレムセンターから放送された。写真は、北アメリカや他地域に向けて放送するための収録をしているところ。

ていました」とマコンバー兄弟は言います。「『われらはバビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した』と歌いながら、私は涙を禁じ得ませんでした。先祖のジョンを思いながら、皮肉めいた偶然を強く感じていました。『われらは外国にあって、どうして主の歌をうたえようか』と、詩篇の作者は捕らわれのイスラエルについて歌っています。しかし私は主の歌を先祖に捧げて歌いながら、不思議なほど故郷にいるような居心地のよさを感じていたのです。私はジョンに捧げるレクイエムを歌いに来たのです。『ああイスラエルよ、私は決して汝を、そしてジョン・アレグザンダー・クラークを忘れはしない』と。

ほかの多くの団員にとってもイスラエルで「バビロンの川のほとりで」を歌うことは霊的に新しい意味を持つことになりました。ある団員はこう言います。「ハイファではみたまがあまりに強く感じられて団員の多くが泣いていたために、『バビロンの川のほとりで』が歌えなくなりそうでした。本当に信じられない経験でした。そして『恐れず来たれ、聖徒』を歌いながら、この言葉はユダヤ人にも当てはまることに気づき、連帯感を感じずにはいられませんでした。」

聖地での撮影

多くの合唱団員と指導者がみたまを最も強く感じたのは、テレビの特別番組の撮影のために数々の聖なる場所に集まった時でした。撮影中は一般の立ち入りが禁止されていたため、私的な雰囲気を楽しみながら歌うことができました。

「イエスがエルサレムに勝利の入城をされる前に、エルサレムの行く末を思って涙されたという場所があるが、きょうはその近くにあるドミヌス・フレウィットの荘厳な峰から『わが主よ、わが神』を歌った」とケン・ウィルクス兄弟は日記に記しました。「アラバマ州の小さな

教会の隣接する墓地に眠る先祖を思うと、涙が込み上げてきた。家族を結び固める神殿の祝福を授けてくださったキリストに対して、感謝で胸がいっぱいになった。」

一行は、山上の垂訓で知られる山で撮影を行なう前に、ティベリアスから2隻の船に分乗してガリリー湖を横断しました。半分ほど渡った所は、キリストがあらしを静められた時のように急なあらしが起きることで知られています。そこで船を止め、祈りを捧げました。そして全員で「主よ、嵐すさび」を歌ったのです。

「ガリリー湖で船が止まった時、みたまを強く感じました」とある団員は言います。「あんなに強くみたまを感じたのは初めてです。」

ある問題があって、合唱団は山上の垂訓の山に遅れて到着しました。日没まで1時間しかありません。そのころには空に薄雲がかかり、ガリリー湖に日が落ちようとしていました。やがて何人かがあることに気づきました。撮影が始まるたびに細長く尾を引いた雲の切れ間から太陽が顔を出し、暖かい日差しをふんだんに注ぐのです。これも撮影のたびに悪天候から守ってくださった主のみ手を証するもののひとつです。実際、合唱団のイスラエル滞在中はほとんど毎日よい天候に恵まれました。雨が降ったのは1度だけ、それも夜間でした。

羊飼いの野で合唱団は、天使が羊飼いたちに現われた場所に近い、さくで囲まれた土地に入ることを許されました。その土地を管理するカソリック教会のピーター・バスコ神父が、撮影の合間に合唱団を訪れ、こう言いました。「皆さんにここで歌う許可を出したのは、あなたがキリストの証し人である知っているからです。」

「羊飼いの野で歌う自分たちの声がかどまとなって返ってくるのを聞いて圧倒されました」とカーター・ナップ兄弟は言います。「『み使い空に……喜びの声 夜空に響く。』これからこの歌を歌うときは、必ずこの時の経験とこだまを思い出すことでしょう。」

しかし、多くの人が最も強くみたまを感じたのは園の



園の墓で、「十字架を仰ぎ見て」を歌う団員(左)と、その撮影をするカメラマン(右)。



墓でした。

「合唱団は撮影のため墓の正面に配置されました」と団員のフェイ・メイソン姉妹は言います。「私は空になっている園の墓の真正面に立っていました。音楽はあらかじめ録音してありましたが、最後のリハーサルの時ジェラルド・オトリー兄弟が『十字架を仰ぎ見て』を声を出して歌う許可を出しました。歌いながら、主のみたまを間近に感じました。一瞬、手を伸ばせば主のみ手に触れられるのではと感じたほどです。」

「救い主に対する理解と愛を一層深めることができました」と語るのと同じく団員のトム・ポーター兄弟です。「主は生きておられます。なぜなら、歌が教えてくれるように『きょう私は、主の歩まれた道を歩み、主がそこにおられるのを感じた』からです。空の墓に向かって立ち、この歌(「十字架を仰ぎ見て」)の最後の部分を歌いながら、その言葉に圧倒されていました。『大いなる神の愛に、私の魂 私の人生、すべてを捧げん。』私は、この経験によって自分に生じた変化を保ち続けたいと願っています。なぜなら、この地に来て、確かに今までの自分とは別な人間になったからです。」

「音楽で語りかけたのです」

タバナクル合唱団のツアーの参加者は全員、ブリガム・ヤング大学エルサレムセンターの在籍者と同様、伝道活動は行なわない旨の同意書に署名していました。ファウスト長老はこの同意書についてこう説明しています。「エルサレムセンターの建設用地入手に当たって、土地の賃貸契約の交渉を始めた時点で、伝道活動をしないうことに同意したのです。私たちは同意というよりは誓約と呼びたいほど、固い決意をもってこの約束を遵守しています。ある日、コレック市長とこのことについて語り合う機会があった時、市長は虐殺によって600万人のユダヤ人が命を落としたことに言及して、こう語りました。

『もう、ひとりといえどもユダヤ人の命を失うわけにはいかないのです。』」

合唱団員、ならびにその伴侶とスタッフは、この同意書に注意深く従いながらも、イスラエルの人々と語り合う機会にも大いに恵まれました。団員は、あらかじめ認可されたタバナクル合唱団のポピュラー音楽のテープをたくさんの人にプレゼントすることができました。それらのテープが認可されたのは、キリストについて言及されていなかったからです。「伝道はしませんでした。でも音楽で語りかけたのです」とある団員は言います。またある人は「人々に愛を残してきました」と言います。

ある団員の夫の愛に満ちた行為はすばらしい結果を生みました。4人の団員とそのうちのふたりの配偶者が、タクシーでカーデシュにあるハダッサ・ヘブライ大学付属医療センターに出かけた時のことです。イスラエルの十二の部族を窓に描いた、シャガールの有名な絵を見に行ったのです。ヨヘヴェッドという受付係をしている女性は、「エルサレムじゅうがあなた方の合唱団の話で持ち切りですよ」と話しかけてきました。その夜のエルサレム最後のコンサートに来てくれるのか聞くと、口ごもりながら「問題があって行けません」と答えました。

一行は帰ってから初めて、「問題」というのは切符を買うお金がないことだと知りました。6人は急いで取って返しました。そして、姉妹のひとりが切符をその女性にプレゼントしたのです。心から喜んで切符を受け取った彼女は、その夜のコンサートで感激の涙を流しました。そしてコンサート終了後、新しい6人の友を一人一人抱き締めてこう言いました。「私には皆さんの親切に報いることができません。あなたたちの名前すら知りません。そこできょう、ハダッサの病院にモルモンタバナクル合唱団の名で木を植えさせてもらいました。この木は生長して、今度皆さんがエルサレムに来られるころには大きくなった姿を見てもらえるでしょう。皆さんがこの国に来てくださったおかげで、私たちに喜びと平安がもたら

されました。」

ケイ・リン・ウェイクフィールド姉妹は園の墓で働く女性から大切な教訓を学びました。「急いで歩いていた時、透き通るようなソプラノの歌声が聞こえてきました」と彼女は言います。「この世のものと思えないほど美しい歌声に魅せられ、人込みから離れてその声の主を探しました。その時彼女を見つけたのです。小柄なイギリス人女性が園の小道を掃除しているのが見えました。

声をかけると彼女は、園の墓を歌いながら掃き清めるとき毎日喜びを感じる、と話してくれました。私がタバナクル合唱団がその日墓の園で歌うことになっていると話すと、目に涙をためて言いました。「ええ、知っています。きょうここで聞けるなんてとても幸運だと思っています」と。私はこの女性を抱き締めると、皆の所に戻りました。目的地に着くのに執着するあまり、旅を楽しむことを忘れてはならないことを、改めて考えさせられました。」

ひとりの団員がベツレヘムのオリーブ工芸店を訪れた時、店長にタバナクル合唱団のテープを贈りました。店長は早速テープをかけました。数分後、その男性が団員の後を追いかけて来て喜びいっぱいに叫びました。「あなた方の音楽のおかげで店の雰囲気が一変しましたよ。」

このようにタバナクル合唱団の音楽は、10日間という短い滞在ながらもイスラエルじゅうに響き渡りました。皆が合唱団の音楽に魅了され、その歌声が消えることを拒んでいるかのようでした。羊飼いの野でいつまでも響いたこだまのように、今もこの国の多くの家族は、合唱団のテープをかけ、ラジオやテレビの再放送に耳を傾けているのです。

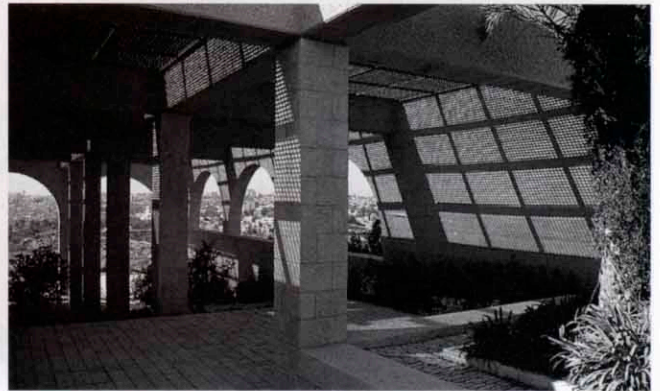
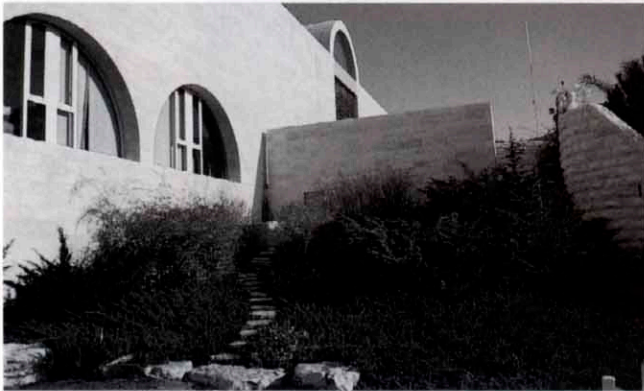
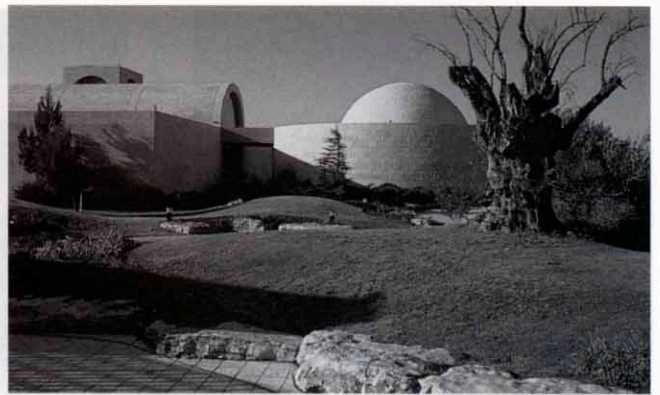
ファウスト長老がティベリアスの聖餐会で話したように、「合唱団の皆さんの行なったすばらしい業に、終わりが来ることは決してないでしょう。」□

光と平安の建物

ブリガム・ヤング大学近東研究エルサレムセンターの玄関近くに、こぶのある大きなオリーブの木が日の光を浴びて立っています。その老木の湾曲した枝の濃い色が、センターの輝く白い石とくっきりとしたコントラストを見せています。根元に生えた緑の草に比べれば、この木にはまるで生気が感じられませんが、枯れているわけではありません。よく見ると、ガリリーから移植された樹齢800年のこの木には、古い幹から新芽が出ているのです。オリーブの木の根は何世紀も生き、植物の中でも最も長寿の木のひとつとして知られています。このことから、この木は見る者に、救い主が説かれた真理に深く根を下ろせば、福音という養分によって成長し、永遠の生命に至ることを思い出させてくれるのです。

エルサレムセンターはオリブ山の北に連なるスコプス山の南端に位置し、古いエルサレムの町を見下ろしています。1.8ヘクタールの敷地に建つ建築面積11,146平方メートルの広大な建物です。7階建ての同センターは30.5メートルの高さで、教室、図書室、多目的室、カフェテリア、食堂、そしてふたつの講堂に、175人収容の学生寮を完備しています。

この建物の建築上のテーマは光と平安です。センターへの訪問者はまず、噴水と水の流れる音が穏やかに聞こえる、ひっそりとした庭園を通ります。そして次に、天井の高いギャラリーが、反射する光と暖かさに満たされて長く続いています。ほとんどの外装材には、大理石とチーク材、それにエルサレム産の石材が使われています。330席を備えた上階の講堂からは、アーチ型屋根の架かった通路が延びています。ですから、この講堂に入るときには、アーチ型屋根の格子窓から漏れる光の中を通り



抜けることとなります。また、講堂は4つの壁のうち3面がガラス張りになっており、光があふれています。エルサレムに類のないこの窓で囲まれた講堂からは、古都エルサレムが一望できます。夜になって谷の向こうから眺めれば、照明のついたアーチ型の窓が何層にも並ぶセンターは、まるで丘の上のランタンのように見えます。

完成当時プリガム・ヤング大学の学長だったジェフリー・R・ホランド長老は、エルサレムのテディ・コレック市長を案内して建物を回りました。45分間、コレック市長はほとんど一言も話さずにセンター内を見学しました。そして最後に口を開いてこう言ったのです。「あなた方は我々が提供し得る最高の土地を手にし、私の想像を超えるものをお作りになりました。これは近年エルサレムで作られた建造物で最も美しい建物だと思います。」

エルサレムを複合的価値観を許容する社会にしようと強力に提唱するコレック市長は、その政治生命を危険にさらしてまで、幾度もセンターの建築に尽力してくれました。1992年2月16日にタバナクル合唱団の招へいを決めた時、市長はこう言いました。「エルサレム市長として25年間多くの困難に遭遇してきましたが、プリガム・ヤング大学のスコプス山キャンパスの設立が最も困難であり、同時に最も重要なもののひとつに数えられると思います。これはモルモン教徒のかたがたにとってではなく、この町が異質なものをどれだけ許容できるかという

石で覆われた優美なアーチを取り入れることで、プリガム・ヤング大学エルサレムセンターの建物には、エルサレムの建築に共通して見られる特徴が反映されている。長く天井の高い廊下(上段左)では、光が大理石の床に反射している。庭園(上段右)の入り口には、樹齢800年の古いオリーブの木がそびえている。

ひとつの試練だったのです。エルサレムは、どんな人も制約を受けずに神を礼拝することが許される町としての模範を示すべき立場にあるのです。何世紀にもわたってこの聖地から阻まれてきた私たちユダヤ人が、エルサレムに合法的な教育施設と礼拝の場所を建てる権利をどうしてほかの人に拒めるでしょうか。」

今日プリガム・ヤング大学の学生は、近東研究エルサレムセンターで学ぶ機会に恵まれています。知識を増し、キリストの生涯と永遠の福音の真理に霊的な根を張りたいと願う学生にとって、このセンターはまさしく丘の上の光と言えるでしょう。そして建築物としても、アーチ型を多用したこの建物は、スコプス山に高くそびえ立ち、実際に、山上の光となって眼下のエルサレムの町を照らし、「平安を」とささやきかけているのです。□



ジョン・K・カーマック長老



モンティ・J・ブラフ長老



タイクオツクエン
戴國源長老

インド、パキスタン、 バングラデシュ、スリランカ における教会

アジア地域は、アフガニスタン、バングラデシュ、ブータン、ブルネイ、カンボジア、中国、^{ホンコン}香港、インド、インドネシア、ラオス、マカオ、マレーシア、モルディブ、モンゴル、ミャンマー(旧ビルマ)、ネパール、パキスタン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ、ベトナムで構成されています。

末日聖徒の宣教師は教会初期の1850年代から、インド亜大陸と呼ばれたこともあった地域で伝道していました。しかし、教会が実際に発展を遂げたのは、ほんの最近のことです。インドをはじめとするアジア地域の国々で、どのように福音が広まりつつあるかを知るために、アジア地域会長会会長であり七十人のモンティ・J・ブラフ長老、また、副会長であり同じく七十人であるジョン・K・カーマック長老と戴國源長老に本誌記者がお話を伺いました。

質問—アジア地域での教会の発展ぶりをお話しいただけますか。

答え—今年の1月にインド、バンガロール伝道部を創設したことが、この地域での発展を物語っています。

伝道部長には、インド出身で元ブリガム・ヤング大学の数学の教授であったグルチャラン・シング・ギル兄弟が召されました。

インドで伝道することは決して容易ではありません。しかし8億人の人々に救いをもたらすために、伝道活動はさらに活発に行なわれることでしょう。最も心強い点は、教会が潜在的に発展する力を備えているということです。この地域は、ちょうど40年か50年前の南アメリカと同様の状況にあります。会員数は比較的少ないのですが、彼らは信仰深く、献身的かつ意欲的です。

質問—これらの国々には、どれくらいの会員がいるのですか。

答え—インドには、1,200人の会員がいます。彼らは国じゅうに散在していますが、大部分はインド中南部の都市に住んでいます。

パキスタンでは、7つのユニットがあり、およそ150人ほどの会員がいます。去年1年間で、60人近いバプテスマがありました。

1992年3月15日、バングラデシュにおける最初の支部がダッカで正式に組織されました。この国では約40人の



PHOTOGRAPH BY ISAAC FERGUSON

会員がいます。

スリランカのコロンボにも支部があります。この島国には112人の会員がいます。

質問—それらの国々で人々が改宗するに際して、何か特にむずかしい点がありますか。

答え—これらの国々に住む人々にとって、貧困は大きな問題です。また、宗教的な文化は彼らのライフスタイルの中心となっていますから、別の宗教を選ぼうとすると、ときとして家族や友達からの反対が大きな障害となることがあります。

質問—これらの問題を抱え、会員たちはどのような信仰生活を送っているのでしょうか。

答え—住んでいる環境や国を問わず、教会が組織されている所では、どこでもすばらしい結果が出ています。つまり、人々の生活は祝福され、喜びに満ちたものとなっています。

質問—このような発展の好例と思われる会員がいらっしゃればご紹介ください。

答え—インドに、エベニーザー・ソロモンという若い男性がいます。英語を話せない彼のお母さんは、何年前にインドで伝道していた宣教師を通して教会を知りました。そして、ふたりの息子を連れて教会に集ったのです。エベニーザーは、数年前にインド国内の伝道部で伝道しました。今では結婚し、シンガポール伝道部の副伝道部長として働いています。また彼の兄弟サミュエルは、パンガロール支部の支部長をしています。

模範的な人々は、ほかにもたくさんいます。パキスタンのラホールに住むある家族は、数年前モルモン経を手に入れました。彼らはそれが真実であるという証^{あかし}を得、最近バプテスマを受けま



左—1,800万人以上の人々が住むネパールも、アジア地域に含まれている。上—首都カトマンズにあるヒンドゥー教寺院前のバグマチ川でもよくする信者たち。



PHOTOGRAPH BY MARVIN K. GARDNER

スリランカ、コロomboのシェリーン・オバタ姉妹は、自国から召された最初の姉妹宣教師である。彼女は1989年から1990年までフィリピンで伝道した。

した。パキスタンには、教会のパンフレット「予言者ジョセフ・スミスの証」を読んだことがきっかけで生活を一新した兄弟もいます。

母国から遠く離れて生活している会員たちの、すばらしい働きもご紹介したいと思います。北アメリカやヨーロッパなどから、公職やビジネスのためにこの地域に来て生活している人々です。彼らは、教会における経験を生かし、どこにあっても支部を強めていますし、地域の多くの人々に福音を紹介する役割も担っています。

また最近では、アジア地域で救援活動を行なうために、夫婦の宣教師が召されています。たとえば、1月にはユタ州から4組の夫婦が、ある総合病院の医者や職員に英語を教えるためにベトナムのハノイに赴任しました。さらに彼らは、ハノイ児童学館の教職員と子供たちにも英語を教えることになっています。

昨秋は、合衆国から経験豊富な4人の教育者とその伴侶が、政府の教育機関および5つの大学における教育顧問として召されました。英語や実務を教え、いくつかの重要な教育委員会の委員としても働くために招かれたのです。彼らは、職務面で接する人々だけでなく、教会に

ついてもっと知りたいという一般のかたがたにも温かく迎え入れられています。何人かの求道者が、今では定期的に教会に集うようになりました。

質問—アジア地域で、教会は今後どのように発展すると思われますか。

答え—みたまが人々の心に触れ、私たちが彼らに福音を宣べ伝えることができるかぎり、ますます発展を続けるでしょう。この大きなぶどう園にとって働き手はあまり多くありませんが、彼らは一生懸命頑張っています。

私たちは、この地域全体にわたって、教会の組織をできるだけ簡素化された基本的なものにとどめようと努めています。人々が福音を学び成長していく過程で、彼らが組織的な運営に忙殺されないためです。

先日、インドのバンガロールの聖餐会で14歳の少年が立派な話をしていました。20歳になる彼のお兄さんが司会をしていました。それは、よそのどこの聖餐会にも引けを取らないほどよく準備され、計画された集会でした。教会が比較的新しく、組織もまだ小さいこれらの地域では、今、将来のために強い指導者を養成しているのです。

私たちの働きに追い風となる要因はほかにもあります。それは、これらの国々では家族のきずながしっかりとっていることです。これは教会の教義、原則と符合するものであり、教会を発展させる要素でもあるのです。□

才能を分かち合う

聖徒の道

トーマス・S・モンソン副管長はこのように述べています。「すべての女性は永遠の計画の中で特別な使命を果たすことができるように、神からその人独自の特質と賜、才能が与えられている。」（「聖徒の道」1992年7月号, p. 111）

キリストのたとえ話にあるように、私たちが最初に神から与えられたタレント、つまり才能を伸ばすならば、神はより多くのものを与えてくださいます。（マタイ25：15-21参照）

日常生活の中で 才能を伸ばすことができる

私たちは日常の家事を単なる雑用と見なすことがあります、そのような仕事も夫や子供、家族や友達への愛のこもった奉仕の精神で行なうならば、自分自身と他人へ喜びをもたらすことができます。おいしい食事を作る、レッスンのために勉強する、庭の手入れをする、手紙を書く、友人や家族をやさしく励ます。このようなことはみな、才能を伸ばすことにつながります。

私たちがそのような努力をすると、神は私たちに祝福し、新しい才能を与えてくださいます。この新たな才能は人格の向上という形で与えられることもよくあります。奉仕する人々の必要を理解する能力が増して、忍耐と愛情、寛容や惜しみない態度を一層示せるようになるのです。

中央扶助協会会長イレイン・ジャック姉妹は彼女の祖母が持っていた才能を次のように思い起こしています。彼女は子供たちの洋服を全部自分で作り、靴下や手袋を編み、牛の搾乳をし、手作りのバターを売り、鶏やアヒル、七面鳥を飼い、扶助協会で副会長を務め、小麦の刈り取りをしました。「こんな

にたくさん仕事をこなすのはさぞ大変だったことでしょう。それを思えば、私は今よりもっと多くの仕事ができるはずです。私は祖母のローがしたのと同じ仕事をする必要はありません。でも、祖母と同じように勤勉で、^{あわ}憐れみ深く、質素に生活し、非常時に備える必要があります。これは私が祖母から受け継ぐべき特質なのです。」

●あなたはこれまでどのような才能を伸ばしてきましたか。

教会の召しに才能を生かす

補助組織の指導者や教師の召しを喜んで受ける人、日曜学校のクラスに準備をして出席する人、話をしたり、伴奏をしたり、活動の指導をする人。これらの人は皆、才能を伸ばしています。召しに応じることによって、一層上手に教えたり、演奏したり、ほかの人々を参加させたりする能力を伸ばすことができるのです。

ILLUSTRATED BY DOUG BARLOW



テキサス州ハイランドビレッジのあるワード部で、ホームメイキングの指導者として新たに召されたマーゴ・メリル姉妹は、寄付された端切れを慈善活動のためのキルトに仕上げるという、一見不可能に思える仕事に取り組みました。キルトを作った経験はありませんでしたが、自分にできることから始めました。布にアイロンをかけて切り、色別に仕分けしました。そして、布の入った箱をホームメイキングの集會に持って行き、ほかの姉妹たちに手伝ってもらってこの小さい布を美しく並べて、つなぎ合わせ、キルトの表布にしました。次にこの表布と芯と裏布を縫い合わせ、最後にふちどりをして、キルトを完成させたのです。姉妹たちは喜んで才能を分かち合い、その結果、皆が喜んだのです。

私たちは自分の才能を伸ばし、召しを受け入れるときに、自信を得、新たな奉仕の機会を愛するようになります。プリヒダ・アコースタ・デ・ペレス姉妹はメキシコのサンフェリペにある小さな支部で扶助協会の副会長を務めましたが、そこではスペイン語を話す姉妹と地元のナワット語を話す姉妹がいました。彼女は毎週行なわれるレッスンの通訳をして自分の才能を生かしました。そして、自分がふたつの文化の架け橋となり、姉妹たちの間に愛をめぐむという新しい才能を伸ばしていることに気づきました。

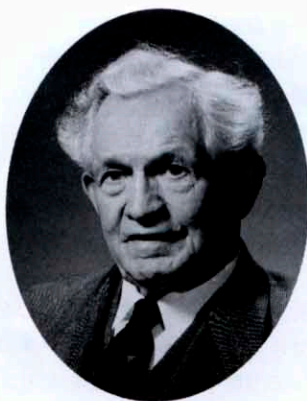
神の子供である私たちは皆それぞれ独自の才能を持っています。神は、私たちが与えられた才能を、神の王国を築くために用いるよう望んでおられます。そうした才能を伸ばすにつれて、私たちは毎日の生活を輝かせ、ほかの人々を祝福することができます。

●現在あなたはどのような新しい才能を伸ばしていますか。□

デビッド・O・マッケイ

人の値

レオン・R・ハートション



あかし
証を求めて

教会の第9代大管長であったデビッド・O・マッケイは卓越した者、誠実な人になるために、そして人の尊厳を守るためにみずからを捧げた人でした。また、福音を愛し、福音によりその高貴な天性に意義と方向づけを見いだしていました。

彼の一生は、現代の教会歴史の中で重要な時期と重なっていました。1873年9月8日、デビッドがユタ州ハンツビルの、両親の農場で生まれた時は、まだブリガム・ヤングが大管長として教会を導いていました。マッケイ大管長が96歳で世を去る時には、彼みずからが全世界に広がる教会を20世紀後半、つまり人類が月に到達した時代へと導いていました。

マッケイ大管長が教会を管理していた期間に、教会の会員数は110万人から280万人に増え、ステーク部数はおよそ3倍に、伝道部数は2倍以上に、宣教師の数は6倍にもなりました。スイス、ニュージーランド、イギリス、そしてカリフォルニアに神殿が建設され、福音はかつてないほど多くの国々に伝えられました。

「善い父母から生まれ」

マッケイ大管長がこの業と責任に備えられたのは、ハンツビルで過ごした幼少のころからでした。主とそのみ業を最優先することを両親の模範から学んだのです。8歳の時、ふたりの姉が亡くなり、その後間もなく、父親がスコットランドへ2年間の伝道に召されました。マッケイ姉妹は10日後に出産を控え、農場を切り盛りし、幼い子供たちを養っていかなければならない状況でした。それは試練と犠牲の時となりましたが、デビッドは信仰と献身について多くを学びました。父親が馬に乗って出発する時、幼いデビッドを抱き上げ、さよならのキスをしてこう言いました。「デビッド、母さんと家族のみんなを頼むよ。」その日以来、デビッド・O・マッケイはその並外れた責任感をはぐくんできていったのでした。

デビッドは両親からじゅうぶんに教えを受けましたが、10代の時、農場に育ったひとりの少年として神の實在とみ業の真実性について自分の証を得たいと思いました。

「まだ私が若かったころ、いなくなった牛を捜していた日のことです。急こう配の丘を登る途中、ちょっと立ち止まって馬を休ませていました。すると、回復された福音が真実であることを、顕現によって知りたいという強い望みが再びわき上がってきたのです。そこで私は馬を降り、手綱を馬の首に投げかけ、木が茂っている所まで行きました。そして、ジョセフ・スミスに啓示されたことが真実であると私に示

年若いデビッド・O・マッケイは、回復された福音が真実であるという顕現を求めて祈った時、すぐには答えを得られなかった。しかし、そこから彼は偉大な教訓を学んだ。



ROBERT
ANDERSON
MILKIN

してくださるよう、神に祈りました。少年としては持てるかぎりの信仰をもって熱烈に心から祈ったつもりでした。

祈りを終えて立ち上がり、忠実な小馬の首に手綱を投げかけてくらのまがりました。再び道を歩き始めた時、私はこう独り言を言ったのを覚えています。『霊的な顕現は何もなかった。正直言って、祈る前の自分と何も変わらない「元のままの自分」だ。』

このことから彼は大切な教訓を学びました。年若い末日聖徒はただ主に願ひ求めても確信は得られないということ、確信を得るには、働き、奉仕し、犠牲を払い、神の戒めに従順に従いながら願ひ求めねばならないことを学んだのです。

石に刻まれたメッセージ

10代のデビッドは農場で働き、後にユタ大学に入り、1897年に卒業しました。彼は在学中、フットボールをし、ダンスバンドでピアノを弾き、また4年生の時には級長に選ばれました。卒業を間近に控えて彼は就職を決めましたが、卒業証書を手にする数日前、イギリスで伝道するようというウイルフード・ウッドラフ大管長からの召しの手紙を受け取りました。これは彼にとって大きな決断であり、今日の多くの若人と同じように悩みましたが、最終的には自分の計画を取りやめ、その召しを受けることにしました。

彼は初め、かつて父親が伝道していた地であるスコットランドに召されま

した。多くの宣教師が経験するのと同じように、最初の数カ月間は容易ではありませんでした。彼はこの失意の期間と、その結果主への献身の気持ちを新たにした時のことを次のように述べています。

「その日、私はホームシックにかかり、気がめいっていました。……

私は学校を出たばかりでした。私は学校が好きでしたし、若い人々も好きでした。若さを謳歌^{おうか}していました。そして外国にやって来て……〔教会への人々の〕偏見に触れて気はふさぐばかりでした。

〔同僚とふたり、〕町に戻る途中、右手の方に建築中の住宅が目にとまりました。その家の戸口の上の石には何か彫ってありました。とても珍しかったのでジョンストン長老に『どんなものか行って見てくるよ』と言って見に行きました。砂利道を半分ほど上った時、石に刻まれた、次のようなすばらしい格言が目に入りました。『あなたが何者であっても、みずからの本分を尽くしなさい。』

伝道を始める前に宿泊する場所を見つけるため、町へ向かいました。歩きながら、私はジョンストン長老に石に刻まれていた言葉について話しました。それから黙って歩いている途中も、私は心の中で自分にこう言い聞かせました。あるいは私の内に宿るみたまがささやいたのかもしれませんが。『あなたは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である。それだけでなく、今は主イエス・キリストを代表する者としてこ

こにいるのだ。教会の代表者としての責任を身に受けたのだ』と。

その日の午後、宿を見つけたころには、私は石に刻まれていたメッセージは自分に与えられたものだと感じていました。そして私たちは、その瞬間から、スコットランドで働く宣教師としてみずからの本分を尽くそうと努めるようになったのでした。」

予言的な祝福

デビッド少年は14歳の時に祝福師の祝福を受けましたが、その中で次のように告げられました。「主はあなたにひとつのなすべき業を備えておられます。それを果たす中で、あなたは、世界の多くの国々を訪問し、散乱したイスラエルを集める助けをし、教えを施すことでしょう。また、教会幹部の兄弟たちとともに座し、人々を管理し、聖徒たちに忠実であるよう呼びかけるでしよう。」

この予言は、彼がスコットランドで伝道に従事していた時に再び繰り返されました。宣教師大会の途中、ヨーロッパ伝道部のジェームズ・L・マクマリン伝道部長が若きマッケイ長老に向かってこう言ったのです。「デビッド兄弟、私に言わせてくれたまえ。サタンはあなたを妻のようにふるいにかけることを願った。しかし神はあなたを心にかけておいでになる。もしあなたが常に忠実であるならば、あなたは教会の管理評議会の一員となるだろう。」それから何年もしないうちに、これら



1890年代、専任宣教師として働いていたデビッド・O・マッケイは、スコットランドのとある家の戸口の上の石に刻まれた格言から靈感を受けた。現在その石は、ユタ州ソルトレークシティの教会歴史美術館に所蔵されている。

の予言は成就しました。

この宣教師大会でマッケイ長老は「主のみたまが豊かに注がれる」のを感じました。それこそ、「少年のころ確信を持てずにいた私が、ひそかに丘や草原で熱烈に祈り求めた顕現でした」と記しています。

愛と尊敬と奉仕

スコットランドでの伝道から戻ると、デビッドは大学時代からの恋人と結婚しました。1901年1月のある寒い朝、彼とエマ・レイ・リッグズを乗せた馬車がソルトレーク神殿に到着しました。

ふたりはそこで、主のみ前に結婚の誓約を交わしたのです。互いに愛し、敬うというふたりの約束は60年以上にわたってしっかりと守り続けられました。晩年のふたりが住んでいたホテル・ユタの部屋を、親しみを込めて「新婚の部屋」と呼ぶ人々がいたほどです。ふたりは口をそろえてこう言ったものです。「新婚時代が69年続いても長すぎはしません。永遠に結ばれているつもりなら、特にそうです。」

1899年、彼は教会の運営するユタ州オグデンのウィーバー・アカデミーの講師になり、後に学長を務めました。教会にあつては、ステーキ部日曜学校

管理会長として働き、1916年には32歳の若さで十二使徒定員会の会員に召されました。そして、中央日曜学校管理会長、教会教育委員長、ヨーロッパ伝道部長として、多才で優れた能力を駆使して精力的に働きました。そして61歳でヒーパー・J・グラント大管長の下で副管長として召され、後にジョージ・アルバート・スミス大管長の下でも同じ責任を果たしました。

1951年、彼とエマ・レイが結婚50周年を祝った年の4月の総大会で、デビッド・オーマン・マッケイはテンプルスクウェアにあるタバナクルの説教台に立ち、集まった人々に語りかけました。予言者、聖見者、啓示を受ける者、そして教会の大管長として満場一致で聖徒たちの支持を受けたのです。78歳の時でした。

「兄弟姉妹の皆さん、そして教会幹部の兄弟たち」と呼びかけた後、彼はこう語りました。「神が私たちをひとつにしてください、私たちが互いの弱点を赦し合い、神の栄光とみ業の発展を真心をもって仰ぎ見ていくことができますように。」

さて、教会員の皆さん、私たちに皆さんの助けと信仰と祈りが必要です。悪意の批判ではなく、助けを必要としています。私たちが直接皆さんとお会いできなくても、皆さんの祈りによって助けていただくことができます。昨日私は、教会員全体の祈りに秘められた力を、故郷の隣人からの手紙を通して知りました。彼は納屋で牛の乳搾りをしていた時に、スミス大管長死去の

訃報をラジオで聞きました。彼は昔の隣人にとってこれが何を意味するかを感じ取り、納屋を出て家に入り、妻に知らせました。そしてすぐに子供たちを呼び集めました。こうして家族全員が、各自の仕事を中断し、質素な家中でひざまずいて祈りを捧げたのです。この祈りの価値を理解していただきたいと思います。そしてこれを10万の家庭、20万、さらに50万の家庭にまで広めていただきたいと思います。そしてどうぞ一致と祈りの力、また教会員全体が支持するときの影響力を肌で感じてください。」

進歩の精神

マッケイ大管長はそれまでと同様、大管長の任期中にも数々の顕著な業績を残しました。大管長は姉妹とともに数々の国々を訪れ、教会員にも教会員でない人々にも祝福をもたらしました。多くの国々で神殿の建築が始まり、伝道活動が盛んになり、会員数が著しく増加しました。偉大な進歩の精神がすべての人の心をとらえたかのようにでした。そして末日聖徒に対して好意を持つ人々も増えていきました。

一人一人への思いやり

しかし何よりも教会員に感銘を与えたのは、すべての人を愛する大管長の姿勢でした。ある日、日曜学校のクラスの子供たちが事前に約束を取って、何キロも離れた所から大管長に会いに

来ました。ところが大管長は、弟のトーマス・E・マッケイ兄弟が危篤状態となったため、病院に駆けつけたところでした。次の日曜日、その日曜学校の教室のドアをノックする人がいました。教師がドアを開けてみると、そこには、マッケイ大管長が立っていたのです。大管長はこのクラスの生徒たちに会って、自分に会いに来てくれた日に外出していて申し訳なかったとわびるためにはるばる来たのでした。

彼はその日の午後事務所にいなかった理由を説明した後、教師や子供たち一人一人と握手をしてこう言いました。「教会の大管長は、どんなことがあってもできるかぎり約束を守ることを知っていただきたいと思います。」

大管長のこのような思いやりの深さは、彼の残した偉大な教訓のひとつであり、私たちが周囲のすべての人々にどのように振る舞うべきかを教えてくれます。スイスとイギリスの神殿の敷地を奉獻するためにヨーロッパを訪れた時、マッケイ大管長はサインを求め熱心なイギリスの若者に取り囲まれたことがありました。一番前の列には9歳ぐらいの女の子がいました。彼女は、同行していた大管長の息子に「大管長にサインしてもらってもいい？」と尋ねました。しかし、父親がとても疲れていると思った彼は断わろうとしました。そのやり取りをそばで耳にした大管長は、女の子に向かって冗談のつもりでこう言いました。「君が読めるくらいわかりやすく書けるといいんだけどね。」女の子は、大管長が本気

で言っているのかどうかわからず、戸惑ってしまいました。ちょうどその時、側近のひとりが至急の用件で割って入り、数分間話が続き、大管長がもう一度話をしようとして振り向いた時には、もう女の子の姿はありませんでした。

「あれほどがっかりした父は見たことがありません」と息子は語っています。「青い服を着たあの女の子を捜してください。」マッケイ大管長は周囲の人々に頼みました。「きっと彼女は私がサインしたくないのだと思ってしまったのでしょう。私の言葉を誤解したのです。なんとしても捜し出してください。」早速、支部長や伝道部長たちは青い服の女の子を捜し始めました。しかし、何の手がかりもありませんでした。そんな時、ある宣教師に思い当たる女の子がいました。彼がその晩遅く大管長に電話すると、次のような指示を受けました。「あの子にこう伝えてください。サインをしてあげられなくて本当にごめんさい。ソルトレークシティーの私の所にあなたのサイン帳を送ってくれるよう支部長にお願いしました。サインをして、直接あなたに送り返します、と。」そしてそのとおりに実行したのでした。

すべての生きとし生けるもの

人の値はいかに大いなるものか！マッケイ大管長は、すべて生あるものは尊敬と心からの思いやりを受けるに値すると感じていました。動物や鳥も例外ではありませんでした。彼はハン



マッケイ大管長は、日曜学校のクラスの子供たち一人一人と握手をして
このように言った。

「教会の大管長は、どんなことがあってもできるかぎり約束を守るということを
知っていただきたいと思います。」

ツピルの農場にしばしば戻り、乗馬や散策を楽しんでいました。ある時農場にどろぼうが入り、大管長のくらが盗まれたことがありました。そこで新しいくらの買い、^{かざ}鍵のかかる馬具小屋にしまっておきました。ある日マッケイ大管長の姉妹たちが、農場の様子を見に行ったところ、馬具小屋の窓のひとつが開いているのを見つけました。彼女たちは、またどろぼうに入られないようにその窓を閉めてきました。それを聞いた大管長は穏やかに言いました。「小屋の中に鳥の巣があるので、私がわざとその窓を開けておいたんだよ。

親鳥がひなにえさを運ぶのに、そこしか通り道がないんだ。ちょうど時間があるから行って見てこよう。」彼は出かけて行き、窓を開けて戻ってくるとやさしくこう言いました。「思ったとおりだったよ。1羽のひなが中に入ろうとしていて、母鳥が中から外に出ようとしていた。」

十二使徒評議員会会員だった時、マッケイ長老はシーザーという名の大きな雄豚を飼っていました。ある日曜日の朝、シーザーが自分のさくを壊してしまったことがありました。列車の時間が迫っていたためさくを修理する暇

がなかったマッケイ長老は、シーザーを鶏小屋に入れました。ところが、そのことを息子たちに言うのをすっかり忘れてしまったのです。その日の夜中の2時、マッケイ家の人々は、鳴りやまない電話のベルに目を覚まされました。よくない知らせではないかと心配な面持ちで受話器を取ってみると、次のような、電話局から口頭で伝えられる電報でした。「シーザーは鶏小屋、水を頼む。」

「きょう私は予言者に会ったのです」

マッケイ大管長の忍耐強さ、気高さ、威厳ある風格、そして彼が仕えた救い主に対する愛は、彼の語るすべての言葉、彼のとるすべての行動に表われていました。それだけでなく、救い主にみずからを捧げると決心したことによって培われた彼の人となりは、静かに座り、何も話さずにいる時でさえにじみ出ていました。ある男性は、ヨーロッパ訪問から帰国したマッケイ大管長と会いましたが、その時の出来事を次のように語っています。

「マッケイ大管長がヨーロッパから帰国された時、私はニューヨークにいました。その時、何枚か写真を撮影することになっていました。しかし、担当のカメラマンが行けなくなりました。そこでユナイテッド通信社はやむを得ず、犯罪事件専門のカメラマンを行かせました。彼はニューヨークで最もむずかしい仕事に慣れていたカメラマンでした。ところが彼は空港に行って2

時間もそこにいた上、非常にたくさんの写真を持って暗室から出て来たのです。写真は2枚だけ撮ればよい、と言われていたにもかかわらずです。上司はすぐに彼をしかりつけました。『一体どうしたというんだ。余計な時間をかけた上に、余分な資材までたくさん使って。』

カメラマンは、余分の費用は喜んで自分で払うとあっさり答えました。さらに彼がかけた余分の時間に相当する額を給料から差し引いてもよいとまで言いました。彼がその時のことについて、並々ならぬ価値を感じていたことは明らかです。数時間後、副社長が彼を部屋に呼んで、何があったのか尋ねました。犯罪事件専門のこのカメラマンは答えました。『まだ幼かったころ、母はよく旧約聖書を読んでくれました。それでいつも私は、神の予言者とは実際どのような人だろうかと考えてきました。ところが、きょう私は予言者に会ったのです。』デビッド・O・マッケイは予言者であるとともに、すべての人の長所に目をやり、真心から思いやることのできる人物でした。□

デビッド・O・マッケイ年表 1873—1970

年	年齢	出来事
1873		9月8日 ユタ州ハンツビルで誕生。
1877	4	ブリガム・ヤング大管長死去。
1897	24	ユタ大学卒業。
1897—99	24—26	スコットランドで伝道。
1899	26	ウィーバー・アカデミーで教鞭を執り始める。
1901	27	エマ・レイ・リッグズと結婚。
1906	32	十二使徒定員会会員に召される。
1918—34	45—61	中央日曜学校管理会長として働く。
1919—21	46—48	教会教育委員長として働く。
1920—21	47—48	全世界の伝道部を訪問する。
1922—24	49—51	ヨーロッパ伝道部長として働く。
1934—51	61—78	第二副管長として働く。
1951	78	大管長として支持を受ける。
1955	82	スイス神殿を献堂。
1956	83	カリフォルニア州、ロサンゼルス神殿を献堂。
1958	85	ニュージーランド神殿を献堂。ニュージーランド・チャーチカレッジを奉獻。ロンドン神殿を献堂。ハワイ・チャーチカレッジを奉獻。
1961	88	教会コーリレーションプログラムに着手する。
1964	91	カリフォルニア州、オークランド神殿を献堂。
1970	96	1月18日、ユタ州ソルトレークシティにて死去。

参考文献

1. ジェームズ・B・アレン「デビッド・O・マッケイ」「教会の大管長」レナード・J・アリントン編
2. ジェームズ・B・アレン「デビッド・O・マッケイ」「モルモニズム百科事典」
3. 「デビッド・O・マッケイ」「神の王国を出て行かせたまえ」

いつか 奇跡が起きて

テラ・ピアソン

ときどき私は、物事を実際よりも大げさにとらえてみたくすることがあります。もっと刺激的な毎日を空想してみたり、すべてを変えるような何かすばらしい劇的なことが起こらないかと想像したりするのが好きなのです。

今まで、祈った時に特別な温かい気持ちを感じたり、示現を見たりした経験が1度もないことにいらいらしていたのも、こういう性格のせいかもしれません。福音が真実であると信じてはいましたが、それも本当のところ、周りの人が皆そう言っていたからなのです。私の毎日とはいえば、教会を中心に回っていました。どうして教会が真実でないなどということがあり得るのでしょうか。それでも、私は実際に何かを感じてみたかったのです。どこからともなく声が聞こえてきて「教会は確かに真実だ」と私に教えてくれたとしたら、どんなに勇気づけられたことでしょう。私は福音によって奇跡がもたらされることを期待していたのだと思います。しかし、涙をためて天父に祈ってみても何も起こりそうにありませんでした。

そんなある夜のこと、今すぐに聖典を読まなければならないという気持ちにかられました。そして、モーサヤ書を読んでいると、込み上げる喜びに胸が熱くなるのを感じました。そこには、ベンジャミン王の説教を聞いた人々が主のみたまに満たされた時のことが書かれていました。「それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与えたもうた……。」(モーサヤ5:2)

これがみたまなのだとは思いました。正しいことを選ぶときに感じる愛の気持ち、そして、好ましい選択をしたときの温かな確信、それはみたまによるものだったのです。今までにもそういう気持ちを感じてはいたのに、気づかなかったのです。

天父は私たちの祈りに耳を傾けてくださいます。それを理解するまでは気づかないかもしれませんが、確かに天父は祈りにこたえていらっしゃるのです。□



PHOTOGRAPHY BY WELDEN ANDERSEN

啓示の家

オハイオ州カートランドにあったニューエル・K・ホイットニーの店舗は、
教義と聖約第88章の中では「神の家」と呼ばれており、
神聖な示現と17に及ぶ啓示を授かる場となりました。
ジョセフ・スミスはそれらを、教義と聖約の中に書き残しています。

JOSEPH SMITH, BY DOUG FRYER



オハイオ州カートランドでの教会活動は、1831年から1834年までの間、ニューエル・K・ホイットニーの店舗を中心に行なわれていました。この店舗は、1年半にわたって教会本部として利用されました。大管長会が王国の鍵を授けられたのも、この場所でした。(教義と聖約90：6；「教会歴史」1：334参照)ジョセフ・スミスも家族とともに、1年半ここで生活しました。そして、ここで暮らしている間に、ジョセフ・スミス訳聖書の作業を完了させたのです。

さらに、初期の教会歴史の中でも、最も神聖な出来事と言われることのいくつかが、1833年1月23日にこの店舗の2階で開催された大会の席上で起こりました。また、この神権時代に洗足の儀式が初めて紹介されたのも、ここでした。(「教会歴史」1：323—324；教義と聖約88：138—141参照)そこに

立ち会った人々の中には、父なる神とその御子イエス・キリストの示現を含む「聖きみたまの神聖な顕われ」を経験した人が何人かいました。

最近のことになりますが、1988年11月18日、合衆国大統領史跡保存賞が、首都ワシントンのホワイトハウスで行なわれた式典の席上で、教会幹部に授けられました。この建物を見事に再建したことが受賞の対象となったのです。

「あなたですね！」

「教会歴史」を著わすに当たって、B・H・ロバーツ長老はニューエル・K・ホイットニーの家族史の中から、次のような文を引用しています。

「1831年2月1日のことだったと思うが、4人を乗せた馬ぞりがカートランドの通りを走り抜け、ギルバート・アンド・ホイットニー商会の店先で止



ILLUSTRATED BY PAUL MANN

まった。その中の体のがっしりした青年が、馬車を降り、階段を駆け上がって、店の中に入って行った。そこには、店舗の共同経営者であるニューエル・K・ホイットニーが立っていた。『ニューエル・K・ホイットニー！ あなたですね！』そう叫びながら、その青年はいかにも親しげに手を差し伸べた。まるで、旧知の間柄のようだった。『どうやら私をよくご存じのようですね。』そう答えたニューエルは、無意識に手を差し出しながら、こう言った。『私はあなたのように、お名前でお呼びすることはできないのですが。』すると、見知らぬこの青年は、ほほえみながら言った。『私は予言者ジョセフです。あなたがここで祈り求めている人物です。さて、私に何をお望みでしょうか。』後から聞いた話によれば、東部にいる時予言者ジョセフ・スミスは、ホイットニー家の人々が自分のカートランド訪問を祈り求めている様子を示現で見ていたのだ。また、『ホイットニーおばさん』（ニューエルの妻のエリザベス・アン・ホイットニーがこう呼ばれていた）は、……何日か前の晩、夫とともに、どうしたら聖霊の賜を受けられるか知りたいたいと思ひ、主に祈り求めた時のことを語っている。それはふたりにとって何物にも勝って受けたいと願っているものであった。

この時、ふたりは自分たちの家の上に栄光の雲がとどまる様子を示現で見た。さらに、天から声があつて、『主のみ言葉を受ける備えをしなさい。その時がまさに来ようとしているからです』という言葉聞いた。（『教会歴史』1：146）

オルソン・ハイドの改宗

後に十二使徒定員会会員となったオルソン・ハイド長老は、次のように記録しています。

「私は、1831年10月30日の日曜日にカートランドで開かれた聖徒の集會に出席し、バプテスマを受けたいと申し出た。その結果、バプテスマの儀式がシドニー・リグドン長老の手によって施され、その後、確認の儀式を受け、同じ日のうちに、予言者ジョセフ・スミスとシドニー・リグドン長老の^{あんしゆ}接手によって、教会の長老に聖任された。それから3日とたたないうちに、自分の取った道が間違っていなかったという特別な確認を、天から自分の心の奥深くにいただくことができた。それは、私が店のカウンターの後ろで働いていたある晩のことであつた。主のみたまが私の上に非常に力強くどまったため、接客もうわのそらとなつた。私は静かに部屋に引きこもり、ひとりで、この霊の喜びを味わつた。この経験は私にとって、長い間忘れることのでき





上—ジョセフ・スミスとニューエル・K・ホイットニーが初めて会ったのは、店舗の中心であるこの部屋だった。ここでは、郵便事業と共同会社の事業も営まれていた。また、この店の従業員であったオルソン・ハイド(後に十二使徒定員会の会員となった)が福音について証を得たのもこの部屋である。

左—店の隅には、チェッカー・ゲームの道具も置かれている。

右—従業員の部屋。

ない、素晴らしいひとときである。」
〔「ミレニアルスター」〔1864年〕26：761〕

知恵の言葉の必要性

ブリガム・ヤング大管長は次のように述懐しています。

「台所の上に部屋があって、そこで予言者ジョセフ・スミスは啓示を受けたり、〔予言者の塾に来る〕兄弟たちに教えたりしていた。兄弟たちはその塾に来るために、何百マイルも旅をして来ていた。その小さな部屋はたかだか、幅11フィート(3.3メートル)、奥行14フィート(4.2メートル)くらいしかなかったであろう。朝食後、この小さな部屋に皆が集まって最初にすることは、パイプに火をつけることだった。そして、たばこの煙の中で、神の王国の偉大な教義について語り合い、部屋中につばを吐き散らし、パイプのたばこがきれいと、今度はかみたばこに手を出すのが常だった。予言者ジョセフ・スミスが塾で講義をするために部屋に入ると、部屋じゅうがたばこの煙で充満していることがよくあった。これに加え、ジョセフの妻が非常に汚れた床を掃除しなければならぬことに不満を漏らしたため、予言者ジョセフ・スミスはこの件について思い巡らし、長老たちがたばこを吸うことに関して主に伺いを立てた。その結果下さ

れたのが、知恵の言葉として知られる啓示である。」(ブリガム・ヤング「説教集」12：158)

ゼベデー・コルトリン兄弟は、この話に付け加えて、次のように記録しています。「知恵の言葉〔教義と聖約第89章〕が予言者ジョセフから初めて紹介された時、……21人中20人がたばこを吸っていたが、その言葉を聞くやいなや、全員がすぐにたばこやパイプを暖炉の中に投げ込んだ。」(「ソルトレークシティ予言者の塾——講義録」1883年10月3日、p.56)

御父と御子の示現

ゼベデー・コルトリン兄弟は次のような神聖な話も記録しています。「予言者の塾が組織され(塾は1833年1月23日に組織された)、その後にかかれた集会のひとつで、私たち全員が集い、ジョセフの講義を聞いている時であった。声を出さずに祈るということで、皆ひざまずいて、両手を高く掲げ、声を出さずに祈っていた。聞こえるものといえば人の息づかいだけであったが、その時人影が部屋の東側から西側へよぎった。ジョセフが、今の人物を見たか、と尋ねた。私もはっきりとその姿を見たし、ほかの人たちも確かに見たはずである。ジョセフはそれに答えて、今のは私たちの長兄、神の御子イエスである、と説明した。その後ジョセフ



ILLUSTRATED BY DALE KILBOURN



1832年3月から1833年12月までの間に、この翻訳室(上)で17の啓示が与えられた。教義と聖約の第78章、第84章から第98章、それに第101章がそれである。予言者ジョセフ・スミスが聖書のジョセフ・スミス訳を完了させたのも、この部屋である。(左)
 右——台所は幅3メートル、奥行4メートルほどの広さで、収納庫もいくつか備えている。予言者ジョセフ・スミスの妻エマは、この台所で数多くの人々に食事をもてなした。その中には、予言者の塾で学ぶ者たちもいた。



1832年12月から翌年6月までの間に、この店舗の予言者の塾の室内(上)で、兄弟たちは少なくとも18回の集会ないしは大会を開催した。この部屋では、1833年1月23日の特別な示現を含む、さまざまな霊的な出来事が起こった。そのためこの部屋は、いわば神殿のような神聖な役割を果たしていた。「見よ、われ誠に汝らに告ぐ、これ神の家、すなわち予言者の塾に於て汝らの互いに挨拶するための一つの範例なり。」(教義と聖約88：136)

右—階段の踊り場(左下)と予言者の塾の部屋(右)。



に、元の位置に戻って祈り続けるようにと言われたので、私たちはそれに従った。するとまた別の人物が通り過ぎて行った。その人の周囲はまるで炎で包まれているようであった。……予言者ジョセフは、今のお方は私たちの主イエス・キリストの御父である、と言った。私も確かにこの目で見た。」(「ソルトレークシティー予言者の塾——講義録」1883年10月3日, pp. 56-57)

この出来事は、当時ゼベデー・コルトリン兄弟の同僚宣教師であり、またその集会に出席していたジョン・マードック兄弟の記録からも確認されています。「そのようなある集会で、予言者は私たちにこう言った。『私たちが神のみ前にじゅうぶんにへりくだり、信仰を働かせるならば、主のみ顔を拝することができるに違いない。』真昼時、私の心の眼が開かれ、悟りの目に光が注がれて、私はひとりのお方を見た。この上なく慈愛に満ちたそのお方のみ顔は、日の光のように明るく輝いていた。髪は明るい銀髪で、巻き毛には堂々たる風格があった。目は射抜くような青色で、首筋の白さもたとえようなないほど美しく、首から足までゆったりとした純白の衣を身に着けておられた。あれほどまでに白い衣は、私はこれまで見たことがない。心の奥まで見抜くようなその表情は、愛にもあふれていた。私が、そのみ姿を余すところなくしっかりと自分の心に刻み込

もうとしていた時に、そのお方は消え、示現は閉じられてしまった。しかし、その時に経験したあれほどまでに深い愛の印象は、その後何カ月間か、私の心に残っていた。」(「ジョン・マードック日記」ブリガム・ヤング大学古文書館所蔵, p. 13)

王国の鍵

予言者ジョセフ・スミスは、1833年3月18日に次のような記録を残しています。「リグドン長老は、自分とフレデリック・G・ウィリアムス兄弟をすでに召されている職に聖任してほしいと申し出た。それは、大神権の大管長会の一員に召されることであって、1833年3月8日に与えられた啓示によれば、王国の鍵を保持することにおいてジョセフ・スミス・ジュニア兄弟と同等の権限を有するというものであった。そこで私は、シドニー兄弟とウィリアムス兄弟のふたりの頭上に手を置いて、この最後の王国の鍵を保有するに当たって、私と同等の責任を分かち持つよう、また大神権の大管長会にあって、副管長として大管長を補佐するよう、それぞれ聖任した。その後、私はふたりの兄弟に、神の戒めを守るに当たっては、忠実で熱心でなければならぬと勧告し、聖徒のためになる指示をいろいろと与え、心の清い者は天からの示現を見ることができると約束



1832年11月6日にジョセフ・スミス(3代目)がこの寝室で生まれた。この子は、ジョセフとエマとの間に生まれた9人の子供のうち4番目であったが、成人するまで生きていたのは、この子が最初であった。このころ、スミス家では養子にした双子の面倒を見ていたが、双子のうちの一ひとは1832年3月に亡くなっている。

した。その後しばらくひそかに祈りを捧げている間に、その約束が実現することになった。この会合に居合わせた多くの人々の悟りの目が神のみたまによって開かれ、その結果、多くのものを見たのである。私はその後、パンとぶどう液を祝福し、その一部を取って、ひとりずつに分け与えた。兄弟たちの中には、天からの示現で、救い主や天のみ使いの群れ、そのほかさまざまなものを見た者たちがたくさんいた。それについては、一人一人が自分の目で見たことを記録しているはずである。」(「教会歴史」1:334-335)□

救われた本

クリスチーナ・アントニオ

私は、1984年10月フィリピン、バターン州のオラニにある製紙工場で品質管理課長として働いていました。ほとんどの製紙工場と同様、私たちの工場でも古紙をリサイクルしていました。ある日、古雑誌の束の中に「モルモンとは」という本を見つけました。好奇心にかられた私はそれを事務所へ持って行き、読み始めました。そこにはジョセフ・スミスとその示現について書かれていました。私は、神が少年に姿を現わされたということを手早く受け入れることができました。神権組織に関する箇所は理解できませんでしたが、扶助協会についての部分は気に入る、その本を何度も読み返しました。

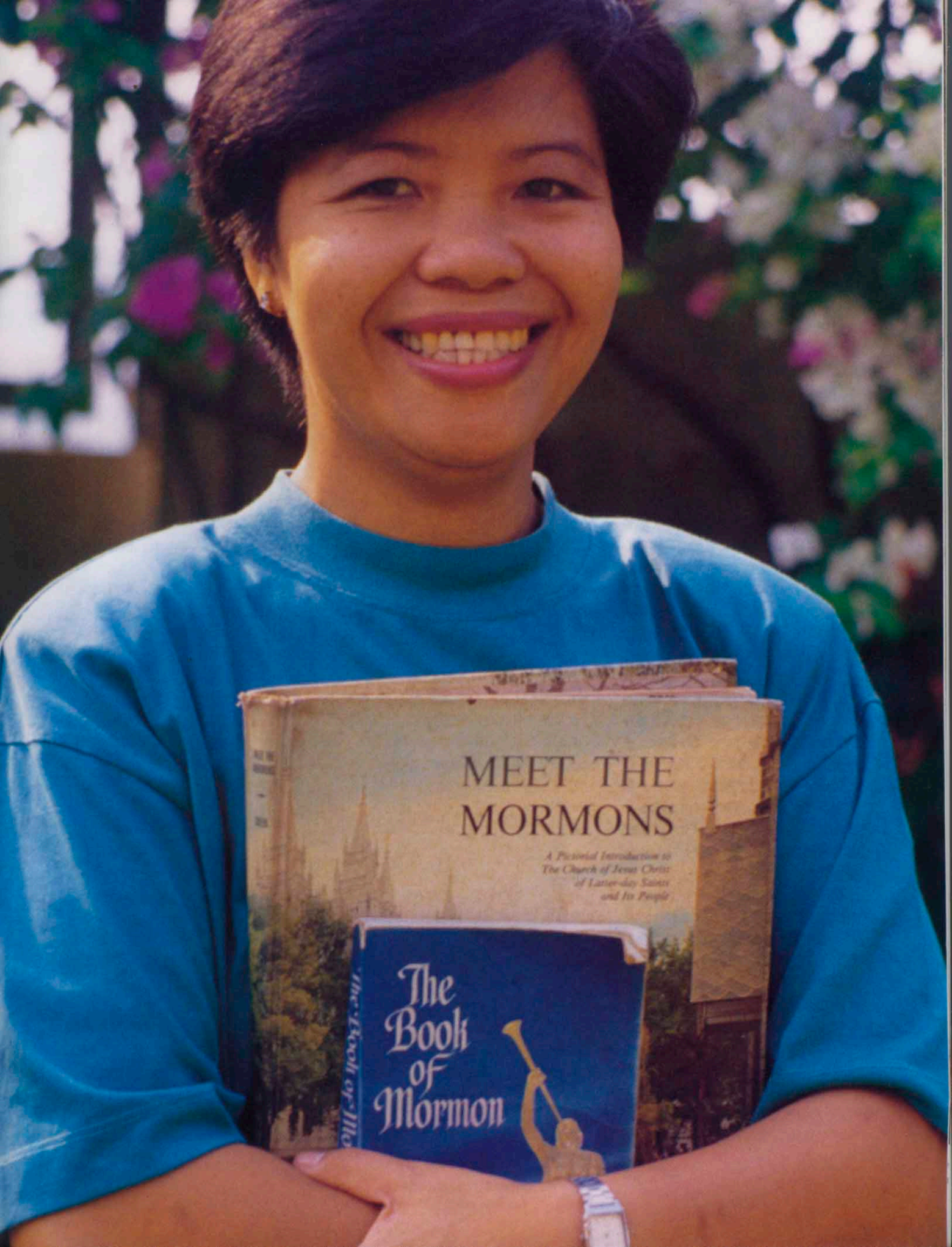
それまで何か月も、私は人生にもつと意義を見いだそうと探し求めてきま

した。熱心なカトリック教徒だった私は、^{にろう}尼僧になるためいくつもの集会に出席していました。それでもなお、自分は大海原を漂う木片のような気持ちがしていました。

2週間後、回収トラックに積まれた古紙を点検していると、青い表紙の本に目が留まりました。それがモルモン経だったのです。運転手にもらってもよいかと尋ね、事務所に持ち帰り、読み始めました。表紙の裏には祈りの方法が書かれていました。「こういうふうに祈るべきなのかもしれない。」私は独り言を言いました。また、キリストがアメリカ大陸を訪れた時のことについて書かれた箇所も列挙されていました。早速そのページを開けると、山上の垂訓をはじめ、イエスがユダヤ人に述べられた教えが記されているでは

ありませんか。これらの章は新約聖書から写し取られたものでしょうか。すぐに私はその言葉を語られたのが聖書と同じお方、キリストであるとわかりました。確かに、主は同じ教えを授けられたのです。そして、キリストはフィリピンにも来られたのではないかと思いました。ニーファイ第一書を開けてみました。リーハイ、ニーファイ、レーマンとはだれのことでしょう。聞いたこともない名前です。この本も大切にしていました。

それから11月の終わりごろ、友人がカレン・ガーディス姉妹を紹介してくれました。彼女はアメリカ合衆国出身の末日聖徒で、平和部隊のボランティアとしてフィリピンで奉仕していました。津波の被害を受けたパンタラン・ルマという地域で働いていたのです。



MEET THE
MORMONS

*A Pictorial Introduction to
The Church of Jesus Christ
of Latter-day Saints
and Its People*

The Book of
Mormon

カレンにはほかの人が持っていない何かがありました。目が青いということだけではありません。彼女の笑顔や表情全体が違うのです。誠実な人柄を感じました。まるで幸福と愛の光が彼女から発しているようでした。

私はなぜ彼女が心地よい自分の家を離れ、暑くてじめじめした貧しい地域で慣れない食べ物を食べているのか、しかも何の報酬も受けずに働いているのか不思議でした。なぜほかの人に心を向けられるのでしょうか。モルモンは皆彼女のような人々なのでしょう。

カレンに会った数カ月後、私は彼女にこう言いました。「私こそ自分の国の人々を助けるべきなのに、何もできなくて恥ずかしいわ。」そして彼女の仕事を何か手伝わせてもらえないか尋ねました。このようにして私たちの友情が始まったのです。私は彼女に宗教について質問しました。彼女もやはり以前カトリック教徒だったので、私の言うことをよく理解してくれました。彼女は私を説得しようとはせず、ただ私の質問に答え、教会のパンフレットを何冊かくれました。

その後の1985年3月、カレンは私をファイヤサイドに招待してくれました。ファイヤサイドで私は、死者のためのバプテスマについて書かれたポスターに目が留まりました。その言葉は私にとって初耳だったので、参照聖句を覚えておきました。姉妹宣教師たちが「走れども疲れず」というフィルムストリップを見せてくれました。私はすぐに知恵の言葉を受け入れました。次に、「天の窓」というフィルムストリップを見せてくれました。「什分の一

(a tithe)」という言葉が10パーセントを意味するのをその時初めて知りました。収入の10パーセントを納め、神様に正直であろうと決心しました。

私は自分が什分の一についてどのように感じたかを会員たちにこう説明しました。「釣りに行くようなものです。えさ、つまり什分の一を使って、魚、つまり祝福を得るのです。」それからもうひとつのたとえを使いました。「さつまいもの新芽を取ると、もっと多くの新芽が出てきて、さつまいもの収穫も増えるのです。」

しかし私は「求道者」と呼ばれるのも、押しつけられるのも嫌でした。家で宣教師から福音を学んではどうかと会員たちに言われると、断りました。でも次の土曜日、姉妹宣教師たちを夕食に招待しました。彼女たちは自分たちが働いていた難民キャンプのスライドを見せてくれましたが、宗教のことは何も話しませんでした。帰り際にいくつかのパンフレットをくれたので、私は読んでみると約束しました。

次の週、私はマニラにいる母の所へ行きました。私の質問に答えてくれる司祭がどこかにいないだろうか、と母に尋ねると、私の兄や姉が出席している聖書のクラスへ行ってみたらどうかと言われました。私は質問をすることができるようにと祈りながら、母に言われたとおりにしました。すると驚いたことに、司祭はバプテスマの重要性について説明し始めました。早速私は手を挙げて質問しました。「コリント人への第一の手紙第15章29節に書かれているように、以前は死者のためのバプテスマがあったのですか。」司祭は

その聖句を声に出して読むと、時計を見てクラスを終えてしまいました。彼は私にこう言いました。「私の部屋で話しましょう。」彼はギリシャ語訳聖書やそのほかの本を引用しながら、復活について説明し始めました。そこで私はこう言いました。「そういうことをお聞きしたいのではないのです。復活は信じていますから。」それから2時間以上も話し合いましたが、私はまだ満足できませんでした。彼は本を2冊貸してくれました。

翌日、私はもっと年輩の司祭に同じ質問を試みました。彼は、死者のためのバプテスマはもう必要ではない、と言いました。

4月1日、製紙工場が一時的に閉鎖されていた時のことです。私は「救いの計画」というパンフレットを読んでいて、これは真実だという確信がわき上がってきました。聖霊が証し、すべてを明らかにしてくれたのです。ジョセフ・スミスは予言者であり、教会は真実であることがわかりました。涙がこぼれてきました。とても大切なものを発見したのです。職場の同僚に話したいと思いましたが、彼らには理解できないだろうと思いました。早めに帰宅すると、カレンが家に来ていました。私は彼女に言いました。「救いの計画は真実だってわかったわ。私、バプテスマを受けたいの。」こうして彼女は、私が宣教師から福音を学べるように手配してくれました。

次の日、ジョンソン長老とバランガン長老から最初のレッスンを受けました。私はバプテスマを受けたいという気持ちがあまりにも強かったので、翌



カレン・ガーティス姉妹(左)とクリスチーナ・アントニオ姉妹。1985年フィリピン、マニラ神殿にて。改宗者のカレンは、クリスチーナが真理を探求するうえで大きな貢献をした。

朝早く彼らの家へ行きました。私の願いを話すと、ジョンソン長老は、バプテスマを受けるには知恵の言葉を守り、教会に出席しなくてはなりませんと言いました。私はこう答えました。「知恵の言葉ならフィルムストリップを見た時から守っています。教会にも何度か出席しました。」それから彼らは3回レッスンをしてくれました。そして1985年4月7日、復活祭に当たる安息日に私はバプテスマを受けたのです。生まれてからずっとこの瞬間を待ち続けてきたように感じました。

その日は断食日でもありました。私は断食し、^{せいさん}聖餐会で証を述べ、初めて什分の一を納めました。証を述べ終わると、正しい決断をしたということをますます強く確信しました。もはや漂っているのではなく、確かな目標に向かって着実に歩んでいると感じました。きっと、みたまが私にそう証してくれたのでしょう。

バプテスマを受けた私は、伝道に出、その後はフィリピンのマニラ神殿で儀式執行者として働いています。

私の生活の中に福音があることは本当に大きな祝福です。ごみの中から拾って救ったモルモン経によって、私自身が救われたのです。□

自分を好きになる

前七十人

ジョージ・I・キャノン



あなたは自分のことをどんな人だと思っていますか。自分のことを考えるときに良い気持ちがしますか。きょうはこのことについてお話ししましょう。

私が伝道部長をしていた時のことです。伝道の任期を終えて帰還する長老や姉妹宣教師を面接することは私の責任のひとつでした。私はいつも彼らにこう尋ねました。「伝道を通して得た経験で家に持ち帰りたいと思うのはどんなことですか」と。帰還する宣教師たちがスーツケースに何を詰め込んでいるかということよりも、彼らの心に詰められたものが知りたかったのです。

ある長老はこう言いました。「自分を好きになって家に帰ります。」

「それはどういうことですか」と尋ねました。

彼は次のように話してくれました。「私はいつも、だれかほかの人のようになりたいと思っていました。高校の時

は、彼のようにになりたいと思っていました。赤いスポーツカーを持っている人がいれば、その人のようになりたくなり、フットボールのクォーターバックをしている選手を見ると、その人のようになりたいと思いました。

伝道に出てからも、同じような問題にぶつかりました。伝道部長の補佐のようにいつでも状況に応じて適切な聖句を引用できる長老になりたいと思っていました。このように、私はいつもだれかほかの人のようになりたいと、そればかり考えていたのです。」

「自分は何者なのか」

「でも、この2年間の伝道を通して、自分が本当は何者なのかということを知りました。私は神の子なのです。私は救い主や仲間たちと良い関係を築いています。両親をはじめ家族に対しても、一層の愛を感じるようになりました。はぐくみ、人と分かち合える才能が私にもあり、またほかの人もそれぞれに才能を持っていることがわかりました。自分が受けているたくさんの祝福に感謝しています。もうこれからは、たとえほかの人が、私の持ち合わせて

いないものを持っていたとしても、うらやましがめることはないでしょう。ですから自分に対して心地よい気持ちを感じながら家に帰れるのです。」

この長老が心に抱いているものを知って、私自身もすがすがしい気分になりました。そして、この青年が自分の真価を認め、その考え方を自分の生活信条に取り入れるようになったことに、非常な喜びを感じました。その後何年にもわたって、この青年が自分自身とその才能を周囲の人々のために用いることで、成長し、成熟する過程を目にする機会に恵まれましたが、それは私にとってとても楽しみなことでした。

救い主は言われました。「すべての者、必ずしもあらゆる賜^{たまもの}を与えられしにあらざ。何となれば、賜は多くあれどすべての人は神の『みたま』によりてその一を受くればなり。ある者はある賜をたまわり、また他の者には別の賜をたまわり、かくしてすべての者これによりて益を得るなり。」(教義と聖約46:11-12)

自分らしく

ジュールズ・ファイファーの著書に



「自分らしく」という本があります。少し引用してみましょう。

「私は子供のころから自分のような人間が嫌いだった。私はピリー・ウィドルドンのようになりたかった。でも彼は私とはまったく違うタイプだった。私は彼が歩くように歩き、彼が話すように話し、彼と同じ高校に通った。

そうこうしているうちに、今度はウィドルドンの様子が変わってきた。ハービー・バンデマンと付き合い始めたからだ。私はわけがわからなくなってきた。ハービー・バンデマンのような歩き方と話し方をするピリー・ウィドルドンのまねをして、歩いたり、話したりすることになったのだ。

ところが、ハービー・バンデマンはジョーイ・ハバーリンのまねをしているという事実突然気がついた。……しかも、ジョーイ・ハバーリンはコーキー・サピソンのまねをしていて……つまり、私はコーキー・サピソンに歩き方と話し方を似せようとしているジョーイ・ハバーリンをまねたハービー・バンデマンの、そのまたまねをしているピリー・ウィドルドンの歩き方と話し方をまねすることになったわけだ。

それにまだ話は終わっていない。コーキー・サピソンは、一体だれのまねをしていたとお思いだろうか。よりによって、私のまねばかりするドビー・ウェリントンというやっかい者のまねをしていたのだ。」

兄...弟

私にはスタンという弟がいます。彼は大学で工学を専攻していたので、どんなものでも直したり、作ったりできます。

私が就職のカウンセリングを受けるために、大学で適性検査を受けた時の

話です。検査をしてくれた男性が「工学関係だけは避けた方がいいですね」と言いました。確かにそのとおりでした。私にはそんな才能はありません。水道の配管を直そうとただけでも、自分の失敗した箇所を修理するのに専門の配管工を呼ぶ羽目になってしまうほどなのです。

私は弟を愛し、誇りには思っていますが、決して彼をうらやましいとは思いません。ただ、弟のいろいろな才能に心から感謝しているのです。彼は我が家のためにその才能を遺憾なく発揮してくれています。先人はこう言っています。「はちわしにはなれないが、はちみつを作ることができる。」

親...指

自分を好きになって、自分らしくなることは大切なことです。私は、教会の若い兄弟姉妹に話をするときに、「自分の手のどちらかの親指を見てください」とお願いすることがよくあります。そして「どこか変わったところはありませんか」と尋ねます。やがて彼らは、その親指を持っているのは自分だけだと答えてくれます。

地球で生活を営んだことのある、またはこれから生まれてくるであろう数限りない人々のうち、あなたとまったく同じ親指を持っている人は、ひとりもいないのです。少しの間、自分の親指を眺めてみてください。親指を見ると、あなたがどれだけ大切に価値のある存在かがわかってきませんか。自分がかかりしたり、至らなさを感じるようなときは、ぜひ親指をじっくりと眺めてください。そうすれば、「私は特別な人なんだ。だれも私と同じ親指は持っていないし、これからだってそうだ」と感じる事ができるでしょう。

より良い自分

フランス出身の改宗者で、素晴らしい姉妹宣教師がいました。彼女はいつも私の机の上に励ましのメモを置いてくれたものです。ある日、彼女はこんなメモを残してくれました。

「ほかの人よりも優れた者になろうとすることは少しも気高いことではない。本当の気高さとは、以前の自分よりも優れた者になろうとすることである。」

デビッド・O・マッケイ大管長は、彼が管理した最後の大会の中で教会の若人に向けてこのような勧告を与えられました。

「肉体は、霊、つまり肉体に命の息を与えているものがなければ、その造られた目的を果たすことはできません。霊は神が創造されたものであり、天にいらっしゃる〔皆さんの〕御父が永遠であられるのと同様に、永遠に存在します。……若い兄弟姉妹の皆さん、内に宿るこの霊こそ、本来の自分の姿なのです。どのような自分を築くかは、あなた次第なのです。」（「大会報告」1967年4月）

アルベール・シュバイツァー博士はこのように言っています。

「人が自分の生活の幾分かを、自分を幸福にすることよりも、ほかの人を助けたり、奉仕したりすることに費やさないならば、本当に幸福な人生は送れない。」

救い主は言われました。自分を捨てて仕えるならば、自分を見いだすであろう、と。この原則こそが、自分が本当は何者かを知り、自分には何ができるかを学び、自分を好きになって、素晴らしい思い出で自分の人生を満たすことのできる最善の方法なのです。□



1836年4月3日、カートランド神殿でジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにみ姿を現わされた主。セオドア・ゴルカ画
ひざまずいて「厳肅なる沈黙の祈り」を捧げ終えた時、予言者ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリは、示現で主にまみえた。
「われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。……その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、
その声は洪水の激する音の如し。」主は、新しく建てられた神殿を、主の「聖き宮居」として嘉納された。(教義と聖約110：1-10参照)



1992年暮れから新年の始めにかけて、モルモンタバナクル合唱団は、初めてイスラエルを訪れた。合唱団は、多忙な公演予定に加え、テレビの復活祭特別番組の収録も、キリスト教の数々の史跡を舞台に行なった。このひっそりとした園の墓(写真)もそのひとつ。十字架にかかれた救い主の肉体は、この墓に横たえられたとされている。(本誌「声を合わせて」pp. 10—21参照)

王国を築いた開拓者

メリル・J・ベイトマン長老

教会の開拓者というのは、19世紀に生きた人たちだけを指すのではありません。メリル・J・ベイトマン長老はそのよい例です。

開拓者という言葉が辞書で調べてみると、「先行して、ほかの人のために道を備える人」という説明があります。1992年に新たに七十人に召された15人の教会幹部のひとり、ベイトマン長老は、1978年には、西アフリカ諸国に福音をもたらすという務めを果たしました。

実業家としても非常に卓越しているベイトマン長老は、1977年に何度かコンサルタントとして西アフリカを訪れました。十二使徒評議員会のジェームズ・E・ファウスト長老は、当時の国際伝道部伝道部長を務めていました。

ファウスト長老はベイトマン長老に、「次回西アフリカを訪ねる際、教会員を訪問していただきたい」と依頼しました。ベイトマン長老は、翌1978年の1月にその依頼に応じることができました。

ベイトマン長老はこのように述べています。「西アフリカから帰国した私は、ブリガム・ヤング大学のガーナ人とナイジェリア人の学生と連絡を取って、ファイヤサイドを開くとよい、と提案しました。」

それは1978年5月のことでした。翌月、大管長会は、ふさわしい男性教会員すべてに、神権と神殿の祝福が与えられるという歴史的な啓示を発表しました。（「聖徒の道」1979年2月号、p.23参照）

その3週間後、ファウスト長老はベイトマン長老に、短期間の伝道の召しを受けるよう依頼しました。こうしてベイトマン長老とエドウィン・Q・キャンロン長老はガーナとナイジェリアに行くことになりました。すでに教会について学び、教会の名の下に礼拝するため、非公式に集会を開いている人々を捜し出し、彼らが誠実に信仰生活を送っていることを確認するためでした。このふたりの宣教師はそのとおりに実行しました。そして、新たに発表された啓示について両国の人々に伝えました。そして帰国し、大管長会に報告しました。

ベイトマン長老はこう述懐しています。「次々と奇跡が起り、会う必要のあった人々を見つけることができました。」

ふたりは、ナイジェリアのカラバールで、教会員のイメ・エドゥック兄弟と会うことになっていました。彼は、およそ25に及ぶ会員のグループを捜し出す手伝いをしてくれるはずでした。しかし、彼は空港に出迎えに来ていませんでした。どうしたら彼に会えるかもわかりません。

「キャンロン長老と私はホテルの部屋へ行き、そこで祈りました。それから下へ降りていき、フロントで尋ねました。ところで、これは人口数十万人の都市での話なのです。その時突然、私たちの話を耳にしたひとりの男性が、声をかけてきました。そしてこう言ったのです。「エドゥックさんはうちの従業員ですが。」

その人は、新聞を買いにホテルに立ち寄ったところでした。そしてエドゥック兄弟がまだ会社にいることを教えてくれました。でも会いに行くなら急がなければ、15分後には帰ってしまう、ということでした。そしてふたりが事



アジア北地域会長会会長メリル・J・ベイトマン長老ご夫妻

PHOTO BY KRISTAN JACOBSEN

務所に着いてみると、エドウォク兄弟はドアの鍵を閉めているところでした。それからの3日間で、ふたりは会おうと思っていたグループすべてを捜し出すことができました。

ベイトマン長老は、1965年から1978年に神権に関する啓示が発表されるまでの間、年に少なくとも1度は西アフリカを訪ねていました。そして幾度か、教会の名の下に集会を開いていたグループの人々と会っていました。しかしそれからの9年間、ベイトマン長老が西アフリカを訪問する機会は1度もありませんでした。

ベイトマン長老にとって、ユタ州リーハイとアメリカンフォークで青少年時代を過ごしたことが、後に仕事や教会での責任を果たす備えとなりました。16歳の時に、日曜学校の8歳児のクラスを教えました。

「レッスンを教えようと努力しているうちに、聖典や福音を学ぶことに魅力を感じるようになりました。」ベイトマン長老は当時を思い起こしながら

そう語っています。

ベイトマン長老の話によると、ある経験のおかげで、どのような環境下でも成功できるという自信が持てるようになったそうです。ソルトレークシティのロータリークラブ(社会奉仕団体)の大会が開かれた時のことです。州内の高校から1名ずつ、この大会に出席する生徒が選ばれました。生徒たちは一人一人面接を受けました。そしてベイトマン長老は、大学4年間の奨学金を支給される学生のひとりに選ばれたのです。

ベイトマン長老はユタ大学で経済学を専攻しました。それからマサチューセッツ工科大学で博士号を修得しました。優秀な教育を受けたベイトマン長老には、輝かしい職歴が待っていました。合衆国空軍士官学校の教官に始まり、ブリガム・ヤング大学の経済学教授、マーズ株式会社のイギリスおよび合衆国での重役、ブリガム・ヤング大学商学部および経営学部の学部長などを歴任し、その後、コンサルタント会

社と資産運用会社を経営するに至りました。

ベイトマン長老の博士論文は、「物価動向へのアフリカ農民の対応」に関するものでした。それがきっかけで、アフリカに何年にもわたって行くことになりました。主が西アフリカ諸国での伝道活動を準備する人物を必要とされた時、このような背景を持つベイトマン長老こそが適任者だったのでしょう。

銀髪で整った顔立ちのベイトマン長老は、ラジオのアナウンサーもうらやむ声の持ち主です。188センチの長身を生かして、高校時代はバスケットボール選手として活躍しました。

「彼はとても上手でしたよ。」奥さんのマリリン・ベイトマン姉妹はそう語り、ベイトマン長老が高校3年の時にはデゼレト・ニュースという州選抜チームの一員であったことも付言しました。

当時のベイトマン長老をベイトマン姉妹はよく知っています。ユタ州ローガンで生まれたベイトマン姉妹は、家族とともにアメリカンフォークに移り住みました。この地で彼女はベイトマン長老とデートをするようになり、ベイトマン長老が伝道から帰還した翌年の1959年に結婚しました。

12年後、ベイトマン長老は、かつて専任宣教師として働いたイギリスに家族とともに渡りました。イギリスに滞在した2年間に、ベイトマン長老はハイワイコム支部の支部長会の一員として働き、後にレッディング地方部の地方部長会の一員として働きました。

ベイトマン長老はこう述べています。「そこでの最初の日曜日、周りを見渡すと出席者は15人くらいでした。しかもそのうちの7人は私たちの家族でした。」しかし一家が2年後にその地を離れるころには、150人ほどがその支部に集うようになり、新しい教会堂が建てられ、献堂されていました。

ベイトマン家には7人の子供がいます。ベイトマン姉妹が語るところによると、子育てに利く魔法の薬などを発明したわけではなく、ただ忍耐し、また主に頼ることで力が得られたということです。

さらにベイトマン姉妹はこう語りま

メリル・J・ベイトマン長老

●**家族**——1936年6月19日、ユタ州リーハイでジョセフ・フレデリック・ベイトマン、ベルバ・スミス・ベイトマン夫妻の間に生まれる。1959年3月23日、ソルトレーク神殿でマリリン・スコールズ姉妹と結婚。子供はマイケル・ジョセフ・ベイトマン(32歳)、マーク・スコールズ・ベイトマン(30歳)、ミシェル・ベイトマン・スウィンダー(28歳)、双子のメリリーとメリッサ(24歳)、伝道の召しを待っているマシュー(19歳)、マッケイ(15歳)の7人である。

●**教育**——ユタ大学で経済学学士号修得、マサチューセッツ工科大学で経済学博士号修得。

●**兵役**——合衆国空軍。1964から1967年までコロラド州コロラド・スプリングス空軍士官学校で準教授を務めた。

●**職歴**——1975年から1979年まで、

前半はブリガム・ヤング大学商学部の学部長、後半は経営学部および大学院経営学科の学部長を務めた。1979年から1990年までバージニア州マククリーンでM&M マーズ株式会社の重役を務め、1990年から現在に至るまでは、ユタ州オレムで経営コンサルタント会社と資産運用会社を経営。

●**教会での召し**——ユタ州オレム南西地区およびユタ州スパニッシュフォーク地区の地区代表、ユタ州プロボ・シャロン東ステーク部およびブリガム・ヤング大学第1ステーク部ステーク部長、イギリス・レッディング地方部地方部長会、ブリガム・ヤング大学第8ワード部監督および同ワード部担当高等評議員などを歴任。1956年から1958年までイギリス伝道部で伝道。

した。「我が家はスキー一家です。」

すると、ベイトマン長老がこう付け加えました。「子供たちはいろいろなスポーツをしてきました。アメリカンフットボール、バスケット、そして野球です。これまで数え切れないほどたくさんさんの試合を見に行きました。」

監督やステーキ部長として働く機会を通じて、ベイトマン長老は、自分が「管理の責任とともにもたらされる外套のごとき愛」と呼んでいるものを身をもって感じました。「それは、自分の管轄下にあるすべての人々への強い愛情です。」

教会幹部として、人々を霊的に高める助けとなれるよう望んでいると、ベイトマン長老は話しています。「人々が、自分の内に秘められた可能性を見いだせるよう、そしてそれぞれの召しをじゅうぶんに果たせるよう、力になればと思います。」

人々を、特に福音についてまだ知らない人々をキリストのみもとに連れ帰りたいのです。私たち皆が、キリストがどういってお方であるか、そして私たちのために何をしてくださったかについて理解を深めていければ、と願っています。」(「チャーチニュース」1992年7月4日付)



メキシコ内務省のバトロシニオ・ゴンサレス・ガリード氏(右端)管理の下に開かれた公式の会合で、教会は宗教法人として認可された。教会を代表して語っているのは、教会法務顧問のアグリコル・ロサノ・H兄弟。

末日聖徒イエス・キリスト教会、 メキシコで宗教法人となる

新 憲法に基づき、メキシコ政府は今年6月29日、末日聖徒イエス・キリスト教会を正式に宗教法人として認可した。これにより教会は、旧憲法の下で行使できなかった権利すべてを享受し、土地の所有も認められることになった。

メキシコ政府は旧憲法時代、どの宗教団体にも法人格を認めず、あらゆる

教会の土地を所有していた。1992年に新憲法を施行してからは、210の宗教組織に法人格を認めたが、今回のように政府高官が列席して登録証を与えたケースは珍しい。

末日聖徒イエス・キリスト教会がメキシコで設立されたのは1879年で、会員数は現在70万人を超えている。(「チャーチニュース」1993年7月17日付)

新会員をフェローシップし、 教会に溶け込めるようにするには

若 いころ私は専任宣教師として働き、今は妻とともにステーキ部宣教師として奉仕しています。これまでの経験を通して、フェローシップが改宗の過程でいかに重要であるかを痛感してきました。私たちには新会員を励まし、助けるために次のようなことができます。

●新会員を伝道活動に参加させる。最もすばらしい会員宣教師というのは、改宗したばかりの会員であることがよくあります。彼らは福音に対してとても感激しています。また教会員でない知人が多くいます。彼らをファイヤサ

イドや会員の家で開く伝道集会に招待したり、彼らが機会あるごとに証を述べるよう励ましたりしましょう。

●新会員を家庭の夕べに招待する。その日は伝道活動、予言者、神殿参入への備えなどのテーマを選びます。招待した新会員やその家族に証を述べてもらいましょう。このようにすればお互いをよく知ることができ、福音を基としたきずなを培うことができます。

●新会員に、個人的な経験や証を教会でのレッスンで述べてもらう。そうすればワード部や支部内のほかの会員たちにも、彼らを知ってもらえます。そして

彼らも教会に対して貢献できるのです。

●友達になる。新会員と交際する方法や彼らを助ける方法を、祈りを通して見いだしましょう。彼らから助けを得る機会や、彼らに奉仕をしてもらう機会にはできるだけ活用しましょう。教会員どうしの友情は教会の集会中だけでなく、地域社会の活動や社交活動の場でも、同様に示されるべきです。

ユタ州ローガン

ジェームズ・C・ジェンキンス

友達の輪

だれでも、あと数人友達が増えるこ

とをいとわないものですが、バプテスマを受けた直後というのは、友達の存在がとりわけ重要で必要な時なのです。改宗したために、家族や友達からよく思われていなかったりすることがあるからです。主が与えられた第2の大切な戒めは「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」です。(マルコ12:31)

私たちは、自分の暮らしの中に彼らを受け入れ、また彼らの暮らしの中にも自分が溶け込めるようにすべきです。サタンは新会員をやつきになって攻撃してきます。ですから私たちは彼らのために力にならなくてはなりません。新会員と知り合い、彼らの関心事、趣味、長所などに目を向けるようにすれば、私たちは永遠の兄弟姉妹を得られるでしょう。

カンザス州プラット
ビル・ピンカートン

教会の召し

私自身がこの回復された教会に改宗し、溶け込んでいくうえで、助けとなった事柄が3つあります。

●ワード部とのつながり。バプテスマを受けて間もなく、私は新しい町に引っ越し、ワード部も変わりました。それをきっかけにしてお休み会員となるのは容易でしたが、熱心に私のために尽くしてくれた会員が何人かいたおかげで、私は新しいワード部とのつながりを持つようになり、友達を作って成長していくことができました。

●ホームティーチングとホームティーチャー。扶助協会の姉妹たちには、これに家庭訪問教師も加わります。私がバプテスマを受けるとすぐに、ホームティーチングの同僚を与えられました。彼は大学院で法学を専攻していて忙しい人でしたが、ホームティーチングの責任を果たすだけでなく、どうすれば良いホームティーチャーになれるのか私に教えてくれました。また同様に、良いホームティーチャーにも恵まれ、彼らは新会員のためのレッスンをしてくれ、私を見守り、教え導いてくれました。

●教会の召し。監督は私に責任を与えてくれました。私は責任と取り組んで



PHOTOGRAPHY BY ELDON K. LINSCHOTEN

いくうちに、神権や教会での召しについて理解を深めていくことができました。

オレゴン州ティガード
ラリー・ベック

常に励まし、助ける

教会の会員となって2年しかたっていませんが、これまでに新会員としてさまざまな経験をしてきました。なかなか教会になじめず、3カ月の間、お休み会員になってしまったこともありましたが、今は教会に戻って、以前より強い会員となれました。そこで、私が教会に慣れるために手助けになったのではないかと思われる事柄を、書き出してみます。

●ワード部の姉妹たちから常に励ましと助けが得られる。

●だれかが個人的に活動に誘ってくれて、活動の間、一緒にいてくれる。

●聖餐会や日曜学校、そのほかの集会中、だれかが隣に座ってくれる。

●ファイヤサイド、ステーク部大会、奉仕活動、ホームメイキングなどの集会にふさわしい服装について教えてもらう。

バプテスマを受けてしまうと、励ましや助けが途切れてしまうことがあります。会員が新会員を助けるに当たって、次のようにしてみてもどうでしょうか。

●新会員の関心事を知るために時間を割り、教会外でも友情をはぐくむようにする。

●新会員を励まし、助け、彼らに愛と関心を示す。私自身、現在ワード部で愛と関心を示されていると感じています。そしてこれ以上の幸せはないと思っています。そのような気持ちを新会員にも味わってもらおうのです。

カリフォルニア州コヴィナ
シェリー・A・バズネット

良い模範

私は1992年10月16日にバプテスマを受けました。私が教会に慣れることができたのは、ある会員が温かく私を見守り、助けてくれたおかげです。彼は良い模範を示し、私の質問に何でも答えてくれました。そして問題があるときや、何かを必要としているときも助けてくれました。

新会員にフェロシップして、彼らが教会に慣れる手助けをする最も良い方法は、自然な態度で彼らの友達にやることだと思います。

コロラド州ローリー空軍基地
ジェイムズ・ピボンカ

誠意を示す

●宣教師のレッスンを終え、バプテスマを受けた新しい会員を訪問しましょう。中には宣教師の訪問がなくなったことに戸惑っている人もいます。ホームティーチャーは訪問し、活動に招待するようにしてください。歓迎されていると感じられずに、教会に来なくなる人はおおぜいいます。

●新会員がもし教会に来ていなかった

ら電話をして理由を聞く。あなたの電話で、危機にある彼らが救われるかもしれません。

●あなたの電話番号と住所を知らせる。そうすれば何か助けが必要なとき、また教会への送り迎えが必要なとき、あなたに連絡することができます。

●誠意を示し、とことん力になる。助けを求められたら、誠意を持って対応しましょう。そうしなければ、二度とあなたに助けを求めてこないでしょう。

●彼らのために祈る。祈りは奇跡をもたらします。そして聖霊はあなたに、どう行動し、何を話すべきか教えてくれるでしょう。

テネシー州ナッシュビル伝道部
シェリル・ロビンソン姉妹

与える機会

私が教会に行き始めたのは、23歳の時でした。福音を実践している誠実な

人々のおかげで、私は教会が正しいと感じられるようになりました。彼らは本当に誠意を持って接してくれました。こんにちは、と声をかけてもらえただけで励みになった時もあります。

バプテスマを受けてから一番助けになったのは、与える機会や貢献できる機会を与えてもらったことです。また、地元の指導者が私を心にかけてくれたことにも感謝しています。彼らは演劇に参加してみないかと声をかけてくれました。それは私にとって意義深い経験でした。また扶助協会などの活動に参加するのも重要なことでした。また、1カ月に1度、ホームメイキングの集会の間、託児を手伝うように頼まれたおかげで、自分は必要とされていると感じました。そしてバプテスマを受けて1年たったころ、ホームメイキングの集会で教えるように依頼されました。このような機会を通して、自分が貢献

できるものをほかの人と分かち合えたのです。だれでも人に貢献できるものを何か持っているはずで、教会がほかの組織と比べ際立っている点は、与える機会があることなのです。

ワイオミング州バーリントン
マーサ・ラースマス

まとめ

1. 新会員と友達になる。助けを申し出る。誠意を示す。
2. 奉仕の機会を与えて、彼らが必要とされていることを伝える。彼らのために祈る。
3. 新会員が歓迎されていると感じられるようにする。良い模範を示す。
4. 新会員を活動に参加させる。家庭の夕べに招待する。
(「チャーチニュース」1993年3月6日付)

ローカルニュース

ローカル モルモン経を通して知った イエス・キリストの愛

いくたびなんじ
「われは幾度汝らを集めんと望みしことぞ」

大阪堺ステーク部羽曳野ワード部 佐藤恵子



「この書物に書いてある事柄がよく理解でき、み言葉が真実である証が得られますように。」昨年秋のある朝、こう祈ってからモルモン経を読み始めました。

ニーファイ第3書第10章を読んでいる時でした。私は胸が高鳴り、目頭に熱いものが込み上げてくるのを感じていました。それは次の聖句でした。

「イスラエルの家に属する者よ。雌

鳥がその雛を翼の下に集むるごとくに、われは幾度汝らを集めて養いしことぞ。

さらにまた、雌鳥がその雛を翼の下に集むるごとくに、われ幾度汝らを集めんと望みしことぞ。イスラエルの家に属したる民にして亡びたる者たち、すなわちこの地にて亡びたる者たちと、エルサレムに住めるイスラエルの家の者たちよ。雌鳥がその雛を集むるごとくにわれは幾度汝らを集めんと望みしことぞ。されど汝らは集めらるるを好まざりき。

われがその命を助けたるイスラエルの家の者たちよ。汝らが真心より悔い改めてわれに立ち帰らば、雌鳥がその雛を翼の下に集むるごとくに、われはこの後幾度にて汝らを集めん。」(4-6節)

この聖句を読んで、私は大きな衝撃

を受けました。なぜなら私の20年近い信仰生活の中の数年は、教会へあまり行かず、モルモン経も本棚でほこりをかぶり、お祈りも同じ言葉を繰り返す、神様やイエス様のことも考えない時があったからです。にもかかわらず、イエス様は私の元へ扶助協会の姉妹やほかの人たちをお遣わしになり、悔い改めの機会を与えて神様のみもとに戻れるように、どれほど忍耐強く寛容な慈愛の情で愛の手を差し伸べてくださっていたかを思い知ったのです。

特に昭和60年の夏の出来事は、忘れられません。それまで私は健康だと思い、また自覚症状もなかったのですが、たまたま受けた検査の結果、突然胃の手術が必要だと言われたのでした。私は心が激しく動揺し、毎月家庭訪問に来てくれていた扶助協会の姉妹に話しました。すると姉妹たちは助けをしたいと言ってくれました。手術後の付き添いは専門の人に頼みましたが、その後回復の遅い私のために、姉妹たちは大切な時間を費してくれました。

兄弟たちは手術前に灌油の儀式をしたり、お花を持ってお見舞いに来たりして、心と体の弱っていた私を助けてくださったのでした。今では確かにこ

れが神様が差し伸べてくださった愛と救いであると感じています。もし私にこの試練が与えられなかったなら、証を得て正しい選択をすることもなかったかもしれません。

このようにして、これまで幾度、イエス様の愛について聞いたり、教えられたりしたことでしょうか。けれども、それが私の心の中まで伝わるには時間がかかりました。「イエス様、あなたの愛はなんと偉大で無限かつ壮大なのでしょう。」それまで気づかずに過ごしてきた20年近い信仰生活で、私は一体何を思い、考えていたのだろうか、心の中で自問しました。

毎日の生活の中で心が乱れたり、迷いが生じて思い悩むことがあります。

私はそれまで、他人にすがったり、頼ることは弱い人間のする、恥ずかしいことだと思っていました。けれども今は、主に頼ることこそとても大切で、賢明な方法だと考えます。「もしわれに来らば永遠の生命を得。見よ、われは憐み深き手を汝らに向いて伸べたれば、すべてわれに来る者はわれこれを迎える故に幸福なり」(IIIニーファイ9:14)と主が言われているからです。

モルモン経を通じてこの証を得られたことはすばらしい祝福と、心より感謝しています。これからは希望を持って信仰生活を続けたいと願っています。いつも私を助けてくれる兄弟姉妹や宣教師に心より感謝しています。(さとう・けいこ ワード部若い女性書記)

うと思われる方たちを見かけるのです。その時私は「これは近々教会に行ってみなければいけない」と心の中で思いました。

12月の第2日曜日だったと思います。私は子供たち3人を連れ、自転車を20分間一生懸命にこぎ、教会に行きました。久しぶりだったせいもあり、胸はどきどきして、緊張していました。「教会に行けば、何か感じるものがあるのではないか。」このような期待を持って家を出たにもかかわらず、1歩教会の中に足を踏み入れた途端、私は逆に惨めな思いにかられました。「私ひとり、何か場違いな所に来たみたいだ」と。

その時とてもつらく、寂しい気持ちになりました。教会からの帰り道、ペダルを踏む足がとても重く感じられました。ところが、心の中にはこんな思いがわき起こりました。「いつまでもこんな気持ちを感じるはずがない。きっと続けて行っていれば、何か得られる。」こう思うと、来週もまた頑張って行こうと、自分を励ました。

ところがその矢先、子供たちが次々に風邪を引き、結局12月は1度しか教会に集うことができませんでした。その間、教会を離れていた時のような墮落した状態の生活が再び続き、私は落ち込みました。

そんな中で、ひとりの姉妹が私に何度も電話をかけてやさしく言葉をかけ、励ましてくれました。私はそれによってどれほど元気づけられたかわかりません。それに励まされた私は、子供たちの病気が治ると、毎週のように教会に集うようになりました。

すっかり忘れていた、聖典を読み祈りをする事など、基本的な戒めを守らなければならないことも教会員のかたがたのお話や証を聞いて思い出し、実行し始めました。そのうち、以前教会に集っていた時にももらったパンフレットや資料なども、もう一度読み直したくなり、いろいろ探していると、私が改宗したころに集っていた伝道所の会員名簿が出てきました。そこは12年前に徳島支部に併合されていましたが、名簿に載っている人々のうちで今の徳島支部に集っているのは私ひとりだけ

導かれて

——「この人々を忘れてなおざりにせず」——

岡山伝道部高松地方部徳島支部 西田尚子



四 国の徳島市から海に沿って25キロ余り南下すると、徳島県阿南市があります。当時15歳ぐらいたった私は、その地にあった小さな伝道所でふたりの宣教師の方から福音を聞き、バプテスマを受けました。それからしばらくの間は休まず集会に出席していましたが、やがて教会から足が遠のき、そのまま随分長い年月が過ぎてしまいました。今となっては、どのような理由で行かなくなったのかは、はっきり思い出せませんが、決して福音が信じられなくなったというような理由ではありませんでした。

教会から離れている間に、私は就職や結婚をし、そのたびに各地の住宅団

地に移り住みましたが、引っ越しの際にはいつも、ほかの荷物と一緒に聖典や教会でもらった資料、パンフレットを持って行きました。「いつかまた、これらを活用する時が来るのではないか」と思っていたからです。引っ越しをした先々では、たびたび、聖書を抱えたいろいろなキリスト教の団体の方たちが訪問して来ました。彼らは熱心に聖書に書いてある教えをそれぞれ独自の解釈によって説き、勧めました。けれども私は、自分が過去に行っていた教会の教えが唯一まことのものだという確信があったので、どの宗教団体の教えも受け入れませんでした。

そのうち私は、自分にこれほど強く、唯一真実だと思わせる教会の教えとは一体どのようなものだったのか、もう一度確かめたくまりました。

その思いが一層強くなったのが、2年前の11月の終わりごろだったと思います。私が自転車に乗って市街地を走っていると、まるで言い合わせたかのように、私の行く所、行く所で末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師だろ

です。私はこの名簿を見ているうちに、悩み始めました。「この人たちを一体どうしたらよいのだろう。」

かつてジョセフ・スミスが自分ほどの教会に加わるべきか思い悩み、天父に祈り求めたことを思い出し、私も同じように、これについて毎日天父に祈り求めました。

その答えは、それからしばらくたった昨年2月3日、高松地方部の地方部大会の中で得ることができました。十二使徒のニール・A・マックスウェル長老は、説教の中でモルモン経のモロナイ書第6章2節から5節の聖句を引用されました。

「また誰であつても真にへりくだつた心と悔いる精神とを以て来て、すでに一切の罪を真に悔い改めたことを教会に証明した者でなければバプテスマを施されなかった。またすでにキリストの御名を受けて終りまでキリストに事えりと堅く決心をした者のほかには、誰もバプテスマを施された者はない。人々はバプテスマを施され、聖霊の力で清められてから、キリストの教会の

会員の中に数えられ、その名を書き留められた。それはこの人々を忘れてなござりにせず、神の善い教えでこの人々を養いたえず善い道をふませ、たえず憤んで祈ることをつとめさせ、またこの人々の信仰のもとであり信仰を完全になしたもうたキリストの功徳にだけ頼らせるためである。」この聖句を聞いた時驚きましたが、同時にこれが私に与えられた答えだと、疑うことなく素直に受け止め、心から喜びました。

主の特別な証し人であるマックスウェル長老に感謝の握手を求めた時、彼は私のほほに軽く手を触れ、やさしく見つめて、私に励ましの言葉をくださいました。この時私は、時が止まったかのように感じられ、心の中で「これは主が言ってくださっている」と思いました。今でもその光景を忘れることはできません。

その後何日か私は興奮していましたが、このことをまず支部長に伝えなければいけないと思い、次の日曜日にそれまでのいきさつをすべて話しました。

そしてもう一度、教会の活動から離れていた人々を主の囲いの中に呼び戻そうと、皆で働き出しました。

「あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。」(マタイ18:12-14)

主の助けを必要としている人々が、私たちを待っているのです。私はこれまでのいろいろな経験を生かし、今まだ霊が飢えて苦しんでいる同胞を主のみもとに助け導く案内人とならなければいけないと感じています。この教会は唯一まことの教会であり、今も天父と御子イエス・キリストは生きていらっしゃることを、強く証します。(にしだ・ひさこ)

信仰と奇跡

—妻の信仰に守られて—

福岡伝道部熊本地方部熊本支部 田代信雄

昨年10月の初めだったと思います。朝起きると激しく腰が痛み、足腰が立ちません。せきもできないほどひどい状態で、その痛み方もいつもとは異なっていました。私は昭和30年ごろから無理な仕事ばかりしてきていました。土木工事を、機械もなく手掘りでしていたそのしわよせが、自分の腰にきたのでした。

その朝の痛みは、何とも言えませんでした。ちょうど起きてきた妻に、その痛みを訴えました。「自分はもうだめだ。もう仕事はできない。」思わず涙がぼろぼろ出ました。私にとっては、仕事が唯一の生きがだったので、それまで数回となく、作事中にけがを

したり、命を落としかけたことがありました。それでも、仕事ができないことは、残念でなりません。それを思うと、泣けて泣けてしかたがありませんでした。

妻はとても心配して、裏の方に出て行きました。後でわかったのですが、妻はそこで神様にお祈りをしていました。しばらくして帰って来た妻は、私に「立ってみてごらん」と言います。私は、家内の言葉を信じて立ってみました。すると、立てました。妻は続けて、「この電話口まで、玄関の所まで歩いてごらん」と言いました。私は、歩いてみました。歩けました。せきをしてみましたが、もう痛くありません

でした。私は驚いて、神様の尊いみ助けに感動いたしました。

翌日、私は妻に、「私も教会と一緒にいこうか」と話をしました。もちろん好きな酒も完全にやめようと決心しました。

妻が末日聖徒になったのは5年前になりますが、若いころから特別に信心深く、私が戦地に行っている時も、終戦後土木、建設の仕事に就いてからも、私のために祈ってくれていました。そのおかげだと思っていますが、私は人間業ではとても考えられないような方法で、命が助かったことが幾度もありました。

昭和16年の5月、私は召集令状を受けました。中国に赴き広東に上陸、それからタイに移り、そこから英領マレー半島縦断、シンガポール陥落などを経て、昭和17年4月27日にビルマ(ミャンマー)に上陸しました。ちょうど東京が第1回の空襲を受けたころだったと思います。ビルマには4年半いました。

昭和20年6月、終戦間際のことです。戦況悪く、司令部より転進命令が出ました。私はそこである軍医さんと行動をともにすることになりました。体調を崩したその方を介抱しながら、すでに後方に下がった部隊を追って、2カ月もの間ふたりでビルマの山野を歩き続けました。その間、敵機の攻撃、ゲリラの奇襲などを受け、死線をさまようことが数限りなくありました。しかし、妻の信仰は、異国のビルマの地の果てまでも届いたのです。妻は、私が帰るのをひたすら待っていてくれました。まさに「愛は強し」です。私は、戦場で数回に及ぶ奇跡を体験し、命を守られ、無事に内地に帰ってくる事ができました。妻の信仰なくして、私は無事に帰れなかったと思います。

土木、建設の仕事に就いてからも同じでした。妻はいつも無事に工事が進み、完成検査も通りますようにと祈っていました。危険な工事だったので、あぶない目にも、随分遭いました。以前に従事した天草岩屋トンネル工事の場合は、山の上から大きな岩が私の頭を目がけて落ちてきました。私が逃げようと立ち上がった瞬間、岩は私の指に当たり、指先は砕けましたが、紙一重の差で命は助かりました。また、あるデパートの社長宅の工事をしていた時には、1.8メートルの高さのブロック塀が、長さ25メートルから30メートルにわたって、一度に倒れてきました。私は逃げ遅れて倒れてしまい、はっと意識を取り戻した時には、下敷きになっていました。しかし幸いにも、コンクリートが倒れたはずみに鉄筋が外れた所があり、私はちょうどそのくぼみに挟まれて命拾いをし、助け出されました。1メートル横にいた人は即死でした。事故を調べに来た警察や労働基準局のかたがたは、よく助かったものだと驚いていました。

それもこれも、妻の信仰のおかげだと思えます。妻に感謝いたしております。このように私が助かってきたのも、奇跡だと思っています。しかもその奇跡は幾度もありました。

妻は、足が大変悪いのです。立ったり座ったりするにも大変な苦痛が伴い、家の中でもつえを頼りにして歩いてい

るくらいです。人にはわからないほど苦しんでいます。それでも改宗してからはずっと、日曜日になると喜んで聖書の入った重たいかばんを肩にかけ、車に乗って教会へ行っていました。妻の神様を信じて生きる姿は、本当に立派なものです。私は、これまでもいつもそう思っていましたし、今でもそう思っています。

私の家族の中で最初にバプテスマを受けて教会に行きだしたのは、長女の桂子けいこでした。そのすぐ後に、長男の浩三こうぞう(注——現熊本地方部長)も改宗しました。もう20年余りも前の話です。私も1度教会へ、どんなところかのぞきに行ったことがありました。そこでは、なんと教会員のかたがたが、自分たちの手で、教会の建物を一生懸命建てておられました。それが大変印象的でした。私は、建築の仕事をしていましたから、教会員の働きに感心しました。また教会の皆さんはとても良い方ばかりでした。でも教会には関心がありませんでした。心に響くものがありませんでした。

妻は子供たちの勧めで教会に入りました。それでも、私はどうしても教会に入ることはできませんでした。娘や妻が日曜日ごとに「一緒に教会に行こう」と誘いましたが、その気にはなれませんでした。また、唯一楽しみにしていたお酒を断ち切る気にもなれませんでした。たばこは以前から吸っていませんでしたが、酒は兵隊に行く前から飲んでおり、その量も、部隊や戦地、

工事現場でもナンバーワンでした。

長男は、母親を教会に誘い、改宗に導きました。しかし、私の場合は、1度も教会に入るように勧めたことはありませんでした。おそらく、私が、自分から進んで教会へ行くのを信じて待っていたのだらうと思います。長男は、「お父さん入ってくれ」と言うのではなく、「いつかは、おやじは入ってくるだろう」というふうに信じて待っていたのでしょ。

あの腰の激痛いたみが妻の祈りによって奇跡的に癒されてから2カ月が過ぎた昨年12月12日の夜、車で15分ほどの所に住んでいる浩三に電話で連絡しました。「お父さんも教会に入るから、すべて手続きを頼む。」長男は驚いて、「お父さん本当。よかった」と言って嫁あきの昭子とともに喜んでくれました。

2週間後の12月27日に、息子の手によってバプテスマを受けました。その日、家族の皆が私のために断食をして、お祈りをしてきていたことを、私は後で知りました。私は今まで、妻の信仰によって奇跡的に命を守られてきました。妻は、私が教会へ行き始めたころ、賛美歌を歌う時に、歌詞を指さして教えてくれました。これからは、私が足の悪い妻を守って、ともに歩み、妻の手をとって教会に行きたいと願っています。

何よりも好きだった酒をやめました。もうひとつも苦にはなっていません。むしろ健康のために良いことと喜んでいます。

モルモン経や聖書の内容は、なかなかわかりにくいですが、早く理解できるよう努力いたします。毎日熱心に福音を教えてくださいました、すばらしい教会の兄弟や宣教師の皆様感謝いたします。(たしろ・のぶお)



田代信雄兄弟と
奥さんのフジエ姉妹

家族の証

「神様はあなたを必要としています」

——教会に戻ることができて——

大阪伝道部奈良地方部名張支部 伊藤 猛

20年ほど前、私は大阪でこの教会を知る機会があり、宣教師から福音を学んでバプテスマを受けました。そのころは、神様の福音を少しでも多く学びたい、多くの人たちと知り合っ
て自分の視野を広めたいという気持ちでいっぱい、自分でも感心するくらい、いろいろな集会に出席していました。

ところが3年、4年と月日が過ぎて気持ちがほんの少しずつゆるんでくるようになると、こんなささやきが聞こえてきました。「少しぐらい、休んでも構わないじゃないか。」

このころ、親の仕事の手伝いを始めたために時間的に忙しくなり、仕事の都合で集会に出席できないことがありました。それが何回か続くうちに、教会が家からとても遠いことや自分の怠慢も重なって、あのささやきが少しずつ自分の心の中で大きく響くようになり、やがて集会にも出席しなくなってしまいました。

そんな状態の中でも教会を忘れたことはなく、集会に出席しなければという気持ちはいつも心の中にありました。また知恵の言葉などの戒めは、なんの抵抗もなく守って生活していました。地区の子供会や自治会の役員の仕事も、教会の責任を受けてイエス様に奉仕するつもりで、一生懸命に果たしました。しかし神権者としては、当然果たさなければならぬ義務と務めについて考えると、あまり大きな声で話せるような状況ではないとわかっていました。

それから多くの年数がたった一昨年のある日、伝道部長会のかたがたの訪問を受け、「この三重県名張市に支部を開設するので助けていただけませんか」と言われました。教会を離れてから年数を重ねるにしたがって、教会に出席しにくくなっていただけに、私にとっては教会に戻る絶好の機会となりました。

名張支部が開設され、教会の集会に久しぶりに出席した時、その場にいた人たち、特に当時の伝道部長の温かい歓迎に、「神様の家に帰ってこることができた」という気持ちがわいてきて、それまで集会に出席しなかったばつの悪さも感じないで済みました。それから少しづつ、集会に毎週出席できるように頑張りました。

それから8カ月ほどが過ぎた昨年の5月、伝道部長から「明日お会いしたいのですが」と、電話をいただきました。翌日、「伊藤兄弟、あなたを名張支部の支部長に召したいのです」という言葉が、私の耳に聞こえてきました。「本当に私のような者を」と、おそれ多く思いながら伝道部長とお話ししているうちに、自分がバプテスマを受けた時の様子が頭の中に鮮明によみがえってきました。伝道部長は話の締めくくりに言われました。「神様は今あなたを必要としておられます。」

その時、ひとつの聖句が頭に浮かびました。「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、

主は何の命令も人に下したまわらない。」(Iニーフай3:7)この聖句を思い起こした時、支部長という重大な召しを受けようという気持ちになりました。

面接を受けてから約1年が過ぎた今、教会の集会にも休まずに出席できることを感謝しています。今、支部長という本当に大きな召しをいただき、名張の会員たちや宣教師と一緒に神様の見守りと導きを受け、少しずつこの地で神様の福音を広められることをうれしく思います。

私は山が好きで、富士山にも家族で何度か登ったことがあります。富士山は中腹の5合目までは車で登れますが、それから後は自分の足で登らなければなりません。神様のみもとへ帰る道もこれと同じだと思います。頂上まで行くには、途中でつらくなることは何度もあります。ましてや頂上に近づくとつれて空気は薄くなり、疲れはより一層激しくなります。しかし、頂上に着いた瞬間の充実感は、とても言葉で書き表わすことはできません。私の場合、途中の山小屋で長い間休憩していましたが、今また歩むことができて感謝しています。教会に戻り、神権者として働ける今、神様を以前よりも近くに感じることができ、本当にうれしく思っています。

子供たちも最初、バプテスマをなかなか受け入れてくれませんでした。毎日の祈りの中に自分の願いを入れていましたら、子供たちの気持ちにも変化が起きてきました。宣教師から福音を学ぶことを拒んでいた子供たちも、福音を学んでもいいと言うようになり、宣教師ととても仲の良い友達のようになって、バプテスマを喜んで受けました。さらに皆でふさわしくなるように準備をして、家族そろって神殿に参入しました。夫婦、親子の結び固めの儀

式も受けるという長い間の希望も、大きな祝福としていただいたように思います。

今、教会に再び集い、主の道を歩んでいるという充実感を強く感じることができています。名張の地にも、私と同じように途中で休憩している会員たちがいらっしゃいますが、会員や宣教師たちとともに、ゆっくりでもいいから、再び歩み出すことができるように手助けしたいと思います。

教会に再び集い、神様のことをいつも心の中で思う生活ができることのうれしさは、お休みしていた時とはまっ

たく違う生活です。子供たちとも同じ話題で、今まで以上に話す時間も増えてきました。家族が一致して、同じ目標に向かって歩むことができるので感謝しています。今度は、家族と一緒に、たとえゆっくりとはあっても、一歩一歩、途中で休まないで歩いていきたいと思います。

天父とイエス・キリストが生きておられ、イエス・キリストが救い主、贖い主であり、末日聖徒イエス・キリスト教会が地上の唯一まことの教会であることを証いたします。(いとう・たけし 支部長)

前の道路で近所の子供が事故に遭ったり、騒がしかったりと、ゆっくりと子育てをする環境ではありませんでした。現在の三重県名張市へは結婚7年後に移ってきましたが、近くには自然がたくさん残っていて、とても静かな所です。気持ちものびのびとして恵まれた環境です。

3つ目は神殿で結び固められることでした。教会で結婚式を挙げましたが、来世でも夫婦でいたいために、いつかは結び固めの儀式を受けたいと望んでいました。

この3つの目標のうちふたつまでは7年で達成できましたが、神殿へ参入するまでには、その後約9年の年月がかかりました。それは、引っ越しをしたために教会から遠く離れてしまい、安息日を含めて教会の集會に出席しなかった時期が何年かあったからです。

私たち夫婦が教会から離れていた間にも、ふたりで心に決めていたことがありました。それは、いつか必ず再び教会に集おう、またいつその日が来てもいいように、私たちなりにふさわしい生活を心がけようというものでした。人から聞かれたときも末日聖徒を名乗ることにちゅうちょすることのないように努力しよう、と話し合っておりました。

そのころ私は看護婦として働いていましたが、休憩の時間になると全員がコーヒーを飲んでいました。私が「コーヒーは飲みませんので」と断わると「コーヒーがだめなら、紅茶にしましょうか」と言ってくださいます。次々と気を遣ってくださることにすまない気持ちはありましたが、「お湯かミルクだけでけっこうです」と自分の希望を伝えると理解してくださり、何度か繰り返しているうちに「伊藤さんはミルクね」と快く言ってくださるようになりました。最初の行動の大切さを知った出来事でした。このように教会に出席できていない私たちでも、教会員であるという気持ちが持てたのは、夫が神権を使って家庭を管理し、できる範囲で戒めを守り、教会員であることを忘れないように生活したいと思っていたので、それが私にも影響していたからだと思います。

神様はこんな不完全な私たちをも愛



伊藤ご家族

念願の結び固めを受けて

—兄弟姉妹に奉仕した時、神殿への道も開かれました—

大阪伝道部奈良地方部名張支部 伊藤康子

今年5月4日、私たち夫婦は東京神殿で結び固めを受けることができました。

1977年3月12日の結婚当初から、ふたりの間で3つの目標がありました。ひとつ目は神様の霊の子供を授かることでした。夫婦ともに子供が好きだったので、早くかわいい子供が欲しいと

思っておりました。結婚後の2年間にふたり、長女の智美と長男の正憲が生まれました。また、4年前には恵まれて次女の瑠美も誕生しました。

ふたつ目は、子供たちを環境の良い所で育てるために住まいを見つけることでした。最初の住まいは、交通量が多く幅が狭い道沿いにあったせいか、

し、理解を示してくださいました。伝道部長や宣教師がたびたび訪問して、「神様はあなたを忘れてはおられません」と励ましてくださったおかげで、私たちは気持ちも新たに教会に再び集うようになりました。

最初三女の瑠美は集会の時間になると機嫌が悪くなり、外に出たがりました。それまではいつでも自由に動き回っていたのに、集会になると「静かにしなさい」と言われ、慣れないせいもあってか、部屋から出たがりました。どうして瑠美は、と悲しくなり、私は祈りました。その答えはこうでした。「小さいころから集会に出席していた子供たちと瑠美を同じに考えてはいけない。たとえ私たちが部屋の外にいても、主人は集会に出席しているのだから、話は主人から聞ける。」しかし実際には、忙しい主人からゆっくり聞くことはできませんでした。ただ、主人の毎日の生活には集会で得た事柄が生

かされており、それが家族にも影響を及ぼすようになりました。このことを確信してからは、気持ちが楽になって、瑠美が外に行きたいと言っても苦にならなくなりました。現在では集会の間はほとんど部屋の中にいられるようになりました。家でも遊びながら賛美歌を口ずさんでいるときもあります。気長に少しずつ少しずつと思って待っていたかがありました。何でもそうですが、1度に完全にしようと思えば疲れも出ますが、少しずつ、できることから頑張っていれば、いつかその積み重ねが報われると証します。

また私は、一昨年、教会に再び集うようになってからしばらくして初めて、本当の幸せとは何かということに気づきました。安息日に集会に出席し、すべての戒めを守ることによって得られる祝福の大きさも知ようになりました。以前は家族の幸せだけを望んでいましたが、伴侶のおられない姉妹や、

手助けのいる兄弟姉妹が皆、幸せな生活を送れるように少しでも手助けができるのであれば、手を差し伸べたいと思えるようになりました。

人の役に立ちたいと願って努力を始めて11カ月が過ぎたころ、神様から大きな祝福をいただいたのは、反対に私の方でした。子供たちが、教会員の皆様や宣教師の温かい見守りと助けの中で、バプテスマを受けたのです。しかも今年は神殿参入をし、夫婦、親子の結び固めの儀式も受けることができました。結婚以来、約16年の長い年月の間待ちに待った日でしたので、感激の大きさは計り知れません。この祝福に心から感謝しています。

神様は私たち一人一人をいつも見つめてくださっています。私たちが神様を常に忘れず生活するなら、見守りがいつも得られることを証します。(いとう・やすこ 支部扶助協会教育担当副会長)

「聖徒の道」 予約購読 キャンペーン 実施中

来年度の「聖徒の道」の予約更新と新規予約のためのキャンペーンが、9、10月の2カ月にわたって行なわれています。

大管長会からのメッセージにあるように、国際機関誌(「聖徒の道」)がすべての家庭に備えられ、一人一人が「聖徒の道」から得られる霊の糧をもって信仰生活を歩まれるよう、お勧めいたします。

毎年予約購読の手続きが期日に間に合わず、1月号を入手できないかたが



たがおられますので、お申し込みはユニットの「聖徒の道」代表者を通して、以下の要領でお早めにお問い合わせください。

●申し込み先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30

末日聖徒イエス・キリスト教会
管理本部経理課

☎03-3440-2351(代)

●締め切り：10月30日(管理本部経理課到着分)

●購読料金：年間2,200円

★聖典に次ぐ貴い書物

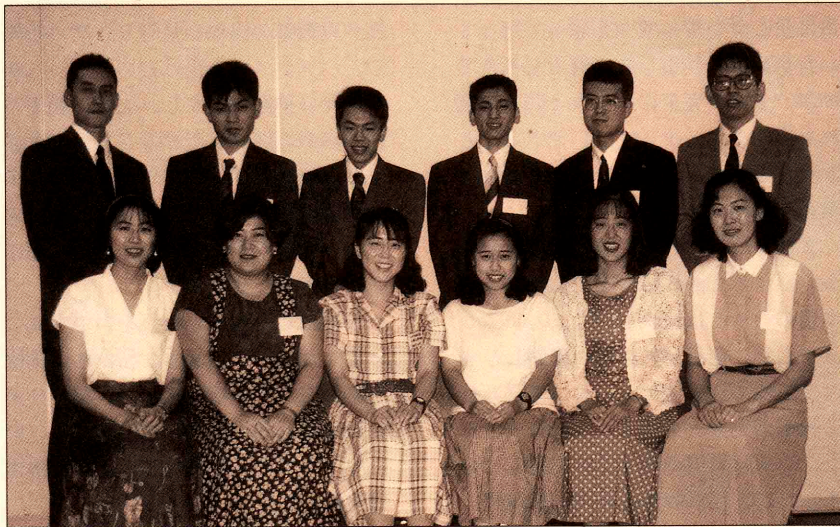
「総大会で述べられるメッセージに耳を傾けるようにしてください。大会は6カ月ごとに開かれます。また、教会の機関誌(「聖徒の道」)を買って、自分の進歩に役立つ言葉に下線を引き、いつもそれを参照するようにしてください。教会の標準聖典は別にして、皆さんの蔵書の中で教会の機関誌以上に価値ある貴い書物はありません。」(第12代大管長スペンサー・W・キンボール)

★福音を学び教える際に 不可欠な教材

「神の選ばれた僕たちを通して啓示された主のみことろとみ旨が、『聖徒の道』に掲載されています。教会員は家庭に『聖徒の道』を備えるようにすべきです。また、福音を学び、教える際に『聖徒の道』は不可欠な教材となります。」(大管長会——エズラ・タフト・ペンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン)

8月に召された専任宣教師

第169期生 12人



後列左から1-6, 前列左から7-12

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 巻出進	京都S/西京極W	福岡伝道部
2. 牧真也	福岡S/八幡B	仙台伝道部
3. 田口雅彦	福岡M/熊本D/大牟田B	神戸伝道部
4. 宮城邦夫	東京東S/八千代W	名古屋伝道部
5. 本多孝之	東京西S/府中W	神戸伝道部
6. 中川仁	静岡S/浜松W	福岡伝道部
7. 田中光美	神戸S/三木B	東京南伝道部
8. 足達洋子	東京北M/宇都宮D/小山B	岡山伝道部
9. 長瀬美樹	札幌S/白石W	大阪伝道部
10. 臼井純子	福岡S/八幡B	岡山伝道部
11. 高橋康史	名古屋西S/福徳W	仙台伝道部
12. 西野嘉恵	我孫子S/北千住W	仙台伝道部

M: 伝道部, S: スターキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

役員の変更

1993年6月29日から1993年7月28日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変更(敬称略)

- 札幌伝道部 稚内支部
新支部長: 松山紀章
(前任者: 山城一裕)
- 仙台伝道部秋田地方部横手支部
新支部長: 田口道晴
(前任者: 中野勝之)
- 仙台スターキ部 石巻支部
新支部長: 渡辺正二
(前任者: 薄井正宗)
- 横浜スターキ部横浜第1ワード部
新監督: 板倉東夫
(前任者: 田口実康)
- 横浜スターキ部川崎ワード部
新監督: 高江洲薫
(前任者: 芹沢正)
- 名古屋伝道部三重地方部伊勢支部
新支部長: 野中治
(前任者: 山崎和男)
- 名古屋伝道部三重地方部松阪支部
新支部長: 山崎和男
(前任者: 作野研一)
- 大阪スターキ部東大阪ワード部
新監督: 今西繁行
(前任者: 大林一夫)
- 福岡伝道部熊本地方部諫早支部
新支部長: 才木剛
(前任者: 宮川尚孝)

新ユニット

- 沖縄那覇スターキ部嘉手納支部
支部長: 古堅宗男



新刊ビデオのお知らせ

●「福音のメッセージ」

これまで単品で販売されていた「天父の計画」「永遠の家族」「本物の幸福」「愛の働き」「放蕩の果てに」の5本が、「福音のメッセージ」として1本にまとめられました。これに伴い、こ

VHS 53196 300 ¥650

れら5本の単品ビデオは在庫限りとなります。

なお、各々の手話入りビデオについては、単品商品のみで、価格も従来どおりです。